345
9

新齋教第一編

多加良

富田敬純

国立国会図書館

始

37.7. 9

新國訓第弍篇

寶

富田鐵之助

大正
3. 2. 18
内交

自序

題して「新密教」と云ふ何か新卓見てもあるか新主義の唱道でもあるかと御尋もあらうがそんな偉い智慧袋も持たねば別に高い見識もない唯吾人は新義眞言宗の末徒である現在佛教宗派の數は通計五十六派あるが新の字を頭に冠つて居るのは我新義眞言宗のみである我宗祖興教大師は此新しい宗教運動の爲めに一期四十九年を犧牲に供せられたのである然るに其後年月を經るに隨つて此新しい氣分が少しもなくなつて何んでも密教は讀んで字の如く祕密にせねばならぬと主張するやうになつた茲に於て元來具象的な現實的な密教は一變して抽象的な空想的な密教と化し殆んど人世と沒交渉のやうな狀となつて來た吾人は實に之を殘念に想ふて堪まらないのであるそこ

で吾人は祕密の開放と云ふことを企て口に筆に出來得る丈の努力を盡して居るので此「新密敎」の試みもまた此外に出てぬのである然れば此店は新發明特許品の賣店ではなくして古い骨董品の新しい店を開いたと云ふに過ぎぬかも知れないとかく新店と云ふものは御世辭に乏いものであるが賣込中は品質は割合に慥なものである讀者諸君安心して此「新密敎」の初店で寶の生涯を御求め下さい

大正三年一月七日

東京豐島ヶ岡加持世界樓上にて

乙亥庵　富田斃　純しるす

新密敎
第一篇

多加良目次

一　緒言……一
二　寶珠の形……六
三　寶珠の名……八
四　五輪塔の哲理……一〇
五　塔婆と人格……二〇
六　人道の極致……二七
七　男女の別……三一
八　夫婦の愛……三七
九　處世の訣……四二
十　國家の敎……四六
十一　崇拜の對象……四九
十二　寶の主……五三

目次

十三　國家の大法……五七
十四　朝の祈り……六五
十五　室生山……六八
十六　寶の生涯……七五

新密教第一篇

多加良

富田敦純著

一　緒言

文明には物質的方面と精神的方面とがある、其物質的方面は明治時代に發揮せられたので、大正の今日は精神的方面を開拓せねばならぬと云ふことは、誰も異論のないことである、明治維新が邦建制度の廢止、庶政の革新であるならば、大正の維新は正に是れ思想界の革新であらねばならない

思想界の革新！是れ頗る廣汎の問題である、此問題の解決を告ぐるには一大偉人の出現を待つより外はない、所が偉人がさう御注文通りには出現するものでない、否偉人の出現するまでには、其偉人の出現を促がす丈の豫備的運動がなくてはならない、此豫備的運動とは、各人が古い思想の囚を出て、新しい思想の花園に遊び、

自ら眞理なりと信ずる思想に向つて、最も眞摯に最も自由に最も大膽に其確立を企つることとである、此試みが愈々多くなり益ゝ發展するに隨つて、我思想界は茲に豐富となり深遠となり幽玄となるのである、即ち思想界の水平線が昇り昇り昇つて、茲に時代が偉人を產み出すのである

元來宗教には各特長があれば、我密教は恰も盛裝せる美人で、禪家は美人の裸派に就いて卑近の一例を擧ぐれば、特長があればこそ異宗異派となるのである、佛教の分體美で、淨土各派は美人の紅涙一滴と云ふ趣がある、美人が迷へる男を誘はんとするや、白粉を塗り紅を差し、綿繡を纏ひ、綾羅を張り、ルビの襟飾に、白金の腕環、金剛石の指環に、眞珠の釦と云ふやうな盛裝をするのも一法だが、熱い涙をホチリと男の腕に注ぐと云ふも一法、亦赤裸々になつて男の懷に飛び込むと云ふも一法である、然るに今の佛教家は此極意を知らないで、裸體美を發揮すべき禪家が、此無垢の裸體に文身して折角の美を失はしめたり、唯一滴と云ふ處に趣のある淨土教が空涙をバラ〳〵出して、人に惡感を催ふせしめたりして居る、密教に至つては盛裝と云ふことに血迷ふて、花嫁の島田髷の上に羽の帽子を冠らせ、總模樣の襠の上にルビ

の襟飾を懸けさせ、尙足らずして十本の指には各二三箇の指環を嵌めさせたやうな趣がある、常識を以て之を見れば、其奇態變狀一驚を喫せざるを得ないが、其本人は此盛裝を以て頗る得意氣に、密教は秘密である、門外漢の批評の如き更に耳を傾くる必要がないなどゝ力んで居る、實に吾人は密教が此非現代的な大膽なる體度に長大息を禁ずることが出來ないのである

眞言秘密とは、不可解の代名詞となつて居る、此不可解の眞言秘密を提げて可解の域に奔らんとするのは、即ち新密教の試みである、或る一派の人は眞言密教の教權は秘密相承で、師より弟子に口傳すると云ふことであるから、何んだか頑迷不靈の古思想の如く考へて、眞言秘密を研究するのは、人類學者が過去の骨片の化石でも研究すると同じいものとして、現代とは何等の交渉がないやうに云ふのであるが、是は實に眞言密教を知らぬから起る妄想である、眞言密教が尊ぶ所の秘密口傳を化石した古思想を型の如く相承するものであると思はゞ开は大變の間違である、元來、言語を文字に寫すと、如何に言語其儘を書いたにせよ、互に相向つて對話するよりは思想が限定せらるゝものである、然るに此文字に寫した經文や論釋に宗教

の教權を附すると云ふことは、一面に於ては誤謬の生ずるを妨ぐことが出來るが、此と同時に、一面に於ては頗る拘束せられて、宗祖派祖の眞意を沒却し去ることがある、禪宗が不立文字を看板に掲ぐるのも、文字がとかく宗祖派祖の眞意を沒却するからてある

口傳！口傳！口傳は、生きた人間から生きた人間に傳ふるのてある、生きた人間の云ふことは、生きて居る、紙や石の經文に書いてあるやうな死んだ文句てはない、生きて居るものは生長する發達する進化する、此生命ある權威ある口傳は、大日如來より大正の今日に至るまて如何に發展進化し來つたか、吾人は玆に如意寶珠なる一夥の美しき緣起よき珠を拉し來つて、諸君の精神修養の多加良に呈せんとするのてある

昔支那の抃和と云ふ人は楚山の下て明玉の璞を拾ふたので、大に喜んて之を楚の厲王に獻じた、厲王は之を玉磨人に見せられた、所が玉磨人は是は石てござると言上したので、厲王は大に怒つて此不屈者めと抃和の左の足を刖つた、厲王が薨して武王が即位した、抃和は此度は目明きも居るだらうと思ふて、再び例の玉璞を獻じた、所が前の如くまた石だと云ふことになつて、今度は右の足を刖られた、武王薨じて文王が位に即いた、抃和は最早前の玉璞を獻ずる勇氣もなく、其玉璞を抱いて楚山の下に三日三夜泣き續けて、涙が盡きて血を流して居つた、文王が之を聞いて天下に兩足を刖られたものは澤山ある、然るに、お前許りが、なぜ其樣に泣くのてあるかと御尋になつた、抃和は力なげに、私は刖られたのて泣くのてはございません、寶玉を獻じたのに之を知らずして石だと云へ、私の如き正直者を嘘吐きだと申さるのが如何にも殘念てござりますと申上げた、そこて文王は驚いて其璞を磨がせられた所が天下無比の寶玉を得ました、依て其名を記念せんが爲めに、其玉を和氏の璧と名けたと云ふ、有名な話が韓子と云ふ書に出て居る、今吾人は讀者諸君に未成品の「寶」を獻上するのてある、讀者諸君が厲王武王となりて斲純を刖るとも、亦は文王となりて眞の「寶」を握るとも、开は一に讀者諸君の勝手てある

二　寶珠の形

寶珠は頗る格好の良い形てある、故に此形の應用せらるゝ範圍は頗る廣いものて、

火燈の上にも載せられ、橋の欄干にも附せられ、高麗犬の頭にもあれば、狐の尾にもある、貯金壺の形となつても居れば、柱暦の眞中にもある、隱れ簑、隱れ笠、小判や小粒と寶盡しの中に入つて最も芽出度いものとせられて居る、所が此形が五輪塔の頭には必ずあるのみか、道側の枯尾花の中に在る石地藏樣も御持になれば、眞言宗の本堂の大壇の眞中にも安置せられてある、こんな譯だから、吾々は毎日〳〵此形を見て居るのであるが、扨て此形が別に何の意味を含んで居るのであるかと云ふ疑問も起らぬ、堯の民は井を堀つて飲み、田を耕して食ふ、帝功我に於て何かあらんと謠ふたと云ふことだが、餘り泰平だと泰平の恩澤が解らぬやうに、寶珠の形が餘り澤山に目に觸れて居るから、別に此形が疑問とも何んともならぬのである

昔し唐の神宗皇帝の時に、蔡君謨と云ふ非常に髯の長い人があつた、或る日天子樣の前に出ると、天子樣は汝の髯は頗る美麗であるが、夜寢る時は布團の中に入れて居るか、または夜具の外に出して眠るかと仰せられた、所が蔡君謨未だ曾て出して寢て居るか、入れて眠るかと云ふことを試して見ないので、即答申し上ぐることが出來ぬから、天子樣に御別れ申して家に歸つて、今夜は之を證して見やうと思ふて、

髯に就くや、髯を布團の外に出して寢て見たが、何だか平生と違ふやうな氣がする、そこで今度は布團の中に入れて見たが、何んだか寢苦い、矢張出して寢たに間違ないと出して見たが變だ、また入れて見たが左樣でもない、出しては入れ、入れては出し、とう〳〵全く眠らずして一夜を明したと云ふ話がある、何んでもないこととして捨てゝ置けば、別に疑問も起らぬが、一たび、何故に此の如くなるやと問題を提出すると、雜然混然幾多の疑問は其處に生ずるのである、世間で圓滿無缺と云へば圓いものと思ふて居るのに、何故に寶珠は上端は尖りて三角形をなし、下邊は圓く半圓形をなすや、また緣起のよいもの芽出度いものとして世に尊崇せらるゝ形が、何故に頗る緣起の惡い石塔や塔婆の頭にあるや、又經には何故に摩尼、此に如意と云ふ、意中の要する所、財寶、衣服、飲食、種々の物、此珠即ち能く之を出す、意の如くに而も得、故に如意と云ふ

なぜ說かるゝや、聞くが如くんば三世の諸佛十方の菩薩は、皆髻中に此寶珠を安置すと、寶珠は左まで尊崇すべきものである乎

三　寶珠の名

小倉百人首で誰でも知つて居るが、菅原道眞公は男山八幡宮に詣てた時に

　　此度はぬさも取あへず手向山
　　もみぢの錦神のまに〳〵

と謠ふた、明治天皇の御歌にも

　　風前花　春風の吹きのまに〳〵ちり來るは
　　いづこの庭の櫻なるらむ

歌　思ふ事ありのまに〳〵つらぬるか
　　いとまなき世の慰めにして

など御讀み遊された、此中のまに〳〵とあるは梵語の摩尼〳〵で即ち寶珠の原名である、梵語の摩尼(Maṇi)は、具には眞陀摩尼(Cintāmaṇi)と云ふので、眞陀は意、摩尼は珠と譯する故、直譯すれば意珠と云ふべきである、此意珠とは意の如くに萬寶を雨らすの意であるから、意譯して常には如意寶珠と云ふて居る、如意とは讀て字の如

く、意の欲するが如く七珍萬寶を雨らすとてある、こんな譯だから、玄應音義には

　　摩尼は珠の總名也

とあり、仁王經良賁疏には

　　摩尼此に寶と云ふ、舊譯に順する也、新には末尼と云ふ、具足せば應に震跡末尼と云ふべし、此に思惟寶と云ふ、會意して飜して如意寶珠と云ふ、意の所求に隨て皆滿足するが故に

と說いて居るのは此消息である、然るに慧苑音義には又異說を出して

　　摩尼此に增長と曰ふ、謂く此寶有る處必ず其威德を增す、舊飜に如意と爲すまたいはく、摩尼正しくは末尼と云ふ、末は謂く末羅此に垢と云ふ也、尼は離と云ふ也、言はく此寶光淨にして垢穢の爲めに染せられず

とて增長と離垢との二譯あるとして居るが、是は如意寶珠の含有する功德を以て名けたるものである、此外にも種々と此如意寶珠のことを說いて居るが煩しいから之に擧げない、さて寶珠のみ何故に此の如く萬寶を雨らし得るや請ふ以下の長談義を辛棒して讀んで下さい。

四　五輪塔の哲理

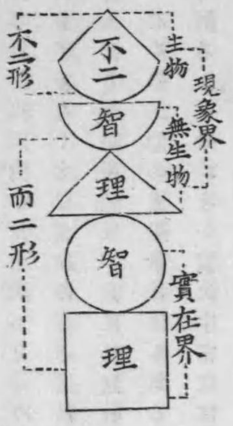
如意寶珠が何故に七珍萬寶を雨らすのであるかを說くに就いては、實に厄介千萬だが、五輪塔の理論から說かないと、トント其理が解らない、如何となれば元來寶珠と云ふものは、五輪塔の頭にあるのが其根本だからである

元來密敎と云ふものは象徵主義の最も發達したもので、どんな面倒な理論でも必ず或る一物に象徵してそれを說いて居る、世間でも隨分「赤い心」だとか、「腹黑い奴」だとか、「四角四面の人」だとか、「圓い人」だとか種々の無形のことを象徵して意味を明にして居るが、密敎は此宇宙の根本原理とも云ふべき

現象界と實在界の關係
唯心論と唯物論の關係
生物と無生物との關係
自然法と人道との關係

是を一基の五輪塔の組織に依て象徵して居る、常に密敎は五輪塔は大日如來の三

昧耶形であると云ふて居るが、宇宙の實在其物を人格的に見たものが即ち大日如來で、此大日如來の發動關係の象徵が即ち五輪塔である、故に五輪塔組織の理論が明かになれば、密敎の宇宙觀、人生觀は說明し盡さるゝのである、宇宙の實在は固より絕對のものである、本來から云へば何とも名くるべきものでない、人は無と云へば無に迷ひ、有と云へば有に迷ひ、不二と云へば不二に迷ふ故に、名くれば其名に拘泥して遂に其眞意義を發揮することが出來ない、平等と云へば其反對に差別があるものと想像し、眞如と云へば之に對して生滅があるやうに思惟するのである、併し默つて居つたのでは更に何のことだか解らぬから、其眞實性を他に知らせん爲めには以聲遣聲で、カチン〳〵と折木を打つて人の囁きを止め、東西々々と口上を云ふやうなもので、宇宙の眞實性を知らせん爲めに、假に之を實在界と現象界の二方面に分ちて說明するの外はない、而して現象界に就いて見ても



空間的に云へば、吾々の住んで居る地球の上にあるものでも、山だ川だ木だ竹だ狸だ芋蟲だ猫だ杓子だと數へ立てたら數限りのない程のものがある、所が地球は云ふまでもなく太陽系統の一の遊星に過ぎぬので、此外に金星もあれば木星も月世界もある、太陽系統は宇宙には無數に存在して居るから、假に吾々の住む地球のやうなものが他の太陽系統にもあるとしたならば、三つ目の小僧も六本手の大入道も居るかも知れない、實に宇宙には無限の世界が存在して居る、梵網經に

我今盧遮那　方坐蓮華臺　周匝千華上　復現千釋迦
一華百億國　一國一釋迦　各坐菩提樹　一時成佛道

と說いあるのは此消息で、空間の廣大無邊なることは眞に驚くべきものである、而して之を時間的に觀察すれば、吾々の住む地球は、春は花が咲き夏は蟬が鳴き、秋は萬山紅に、冬は枯林蕭條と云ふやうに、四時交替し寒暑往來するのである、こんな一年のことはさて置き、遠く地球の過去を考ふれば此地球の屬する太陽系統は、幾百萬年の昔は一箇の濛々たる星雲に過ぎなかつたのである、此星雲が火球となり、此火球が分れて幾多の火球となり、幾萬億年を經、遂にて冷却して太陽とか、木星とか

金星とか、地球とかなり、而して地球には植物が生じ、次で動物が出來き進化發展して、茲に人なるものが出來たのである、所が一たび出來たものは何日か壞るゝと云ふ譯で此吾々が再び退化し、地球が全く冷却し、太陽が光を失ひ、太陽系統が遂に破壞して、再び以前の星雲に復する時が來るのである、此の如く轉々極りなき狀態を仁王經には、世界が成立する時、世界に人間が住む時、再び破壞する時、全く何物もない空虛の時の、成住壞空の四劫と說いて居る、實に時間的に宇宙の恒久悠遠なるとを考ふれば、亦無限と嘆美するの外ないのである、然れば宇宙は空間的時間的に無限であると云ふの外ないのである、此の如き空間的時間的の現象界の差別相は抑々何より起るや、吾人は最も之を簡單に答ふることを得るのである、开は即ち精神と物質との二の關係の差異に過ぎてので

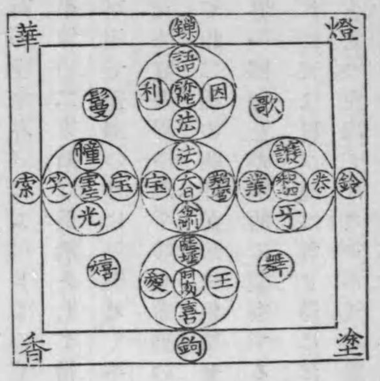
世の唯物論者は宇宙は皆物質で、吾人が精神と名くべきものも、單なる物質の力に外ならぬのであると主張として居る、然るに唯心論者は物質を物質として認識するのは精神であるから、精神を離れて物質が獨存することは出來ない、換言すれば客觀は主觀の存在を假定して始めて存在し得るものである、所謂三界唯心心外無

別法であると唱道して居る、併し唯物である唯心であると云ふが如きは、頗る陳腐なることで、物質から見れば萬象皆物質で、精神から見れば法界凡て精神である、此の二は二にして一、一にして二で、所謂二而不二と云ふべきである、密教では此物質的方面を胎藏界曼荼羅を以て代表せしめ、精神的方面を金剛界曼荼羅を以て代表せしめて居る、(固より金剛界にも物心あり、胎藏界にも物心あるも、差別的に說く邊より斯くは分ちたのである)

胎藏界曼荼羅

金剛界の曼荼羅は、五解脫輪の智差別曼荼羅で、胎藏界の曼荼羅は十三大院の理平等の曼荼羅である、五解脫輪は圓形割で、十三大院は方形割である古人が「奇しきは空なり、空より奇しきは海なり、海よりも奇しきは人の心なり」と云ひ、心こそ心迷ひはす心なれ心の駒に心ゆるすな」喝破した如く心と云ふものは實に奇妙不可思議のもので、笑ふかと思へば忽ち泣き、喜ぶかと思へば直に悲む、喜怒哀樂の情の轉變の速かなること、平板に圓球を轉ずるが如きものである、故に或和學者は心とはころ〳〵の約つたのだと說いて居るが、ころ〳〵ところがるの「が心的狀態である、然れば形に象徵するとしたならばころ〳〵と回轉し易き圓い形が最も適當であらう

金剛界曼荼羅

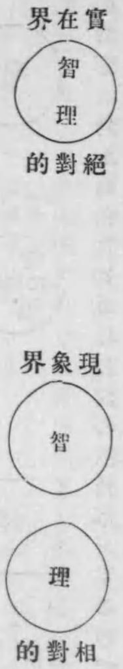


所が物質と云ふものは之と全く反對で、質礙有體であるから、一升瓶に二升の水を入れたいと云ふたとて無理な注文で、黑い反物を赤く染めたいと云ふた所で出來るものではなく、お玉杓子は耳掻とならず、摺木は楊枝の代用は勤まらぬのである、然らば物を形に象徵するとせば、圓の反對の最も轉じ惡い方形が能く當嵌まるのではあるまいか、金剛界の五解脫輪の曼荼羅が圓形割で、胎藏界十三大院の曼荼羅が方形割であるのも此理に外ならぬのである

五輪塔は此金剛界曼荼羅の圓形と、胎藏界曼荼羅の方形とを根柢として組み立てたるものである、現象界に金剛界と胎藏界あるとせば、實在界にもまた此二者は存在すべきものであつて、起信論で說くやうな工合に、平等的方面が實在界で、差別的方面が現象界と云ふべきものでない、現象即實在である以上は實在界にもまた差別平等の二方面は嚴然として備り居るべきである、されど現象界の夫の如く差別即平等で、差別の外に平等なく平等の外に差別はない、所謂理智不二である、五輪塔は元來、實在界の理平等智差別の二形と、現象界の理平等智差別の二形に外ならぬので、此二種の關係が形に象徵せられて五層の塔となるのである、即ち絕對一如の法界一圓相を差別的に觀察するのが五輪塔其物である、扨て法界を差別の眼より見れば、天は覆ひ地は載せ陽は浮び陰は沈みつゝあるので、物と心、何れが陽何れが陰と定つた譯ではないが、天を陽とすれば地を陰とすべきもので、心を天とすれば物を地とすべき筈である、故に自然の理として金剛界は天曼荼羅、胎藏界は地曼荼羅となるのである、故に五輪塔の組立に於ては此地曼荼羅なる胎藏界の方形を最下層に置き、其上に天曼荼羅なる金剛界の圓形を載せるのである、此二層は實在界

の智差別の心と、理平等の物とを表したものである

而して現象界と實在界とは、現象即實在であるから、現象界の外に實在界なく實在界の外に現象界なく、現象界と實在界は其間一毫を增さず一糸を減ずるものではない、只實在界は絕對界であるから差別は智差別當體其儘に存在し、平等は理平等當體其儘に存在することを得るものである、別に他との相對的關係に依りて制限せらるゝものでない



然るに現象界は相對界である、故に主觀と客觀、我と非我と云ふやうに實在界其儘であつても、其間に相互關係の理法を認むるのであるから互に制限せられつゝあるのである、即ち源因結果の關係が此現象界に來つて始めて意義を有するのである、故に現象界は實在界と其量に於て全く同一であるとは云へ、有限の吾人は此全分を知ることは出來ない、茲に於て現象界は其金剛界と胎藏界の本形を變化せし

めねばならぬのである、起信論が絶對界を眞如門と云ひ相對界を生滅門と稱するは此趣である、

然れば則ち、吾人は實在界其儘を請取ることは出來ぬから、此實在界の理智の形を變化せしむる必用がある、茲に於て智の圓形は中央より割りて二箇の半圓形となし、理の方形は角から角に切りて二箇の三角形とするのである、而して半圓の一箇と三角の一箇を非情界即ち無生物の分に當つるのである。

五輪塔の第三層の三角形、第四層の半月形は無生物を表したものて、第五層の寶珠形は生物を表したものてある、而して有情界即ち生物と非情界即ち無生物との差

第四層　第三層　は和合と非和合にあるのてあるから、五輪塔の第三層の三角形と第四層半月形を積むには、原形の切口の方を合せずに外面と外面とを重ぬるのてある。

「木曾殿と背中合せの寒さ哉」て、背中合ては和合は出來ないのてある、然るに第五層の寶珠形は理の半形を上にして智の半形を下にして切口合せに積むのてある、切口合に積めば、茲に二物は和合して一物體となるのてある。

五層

元來生物の生命を保つ所以は切口合せに合するに依て生物たるを得るのてあつて、桃や柿を接木するにも、切口を甘く合はすればこそ接くが、切口を逆にして皮の方を合せたのては枯れてしまう、今は醫學が發達して顔に腫物が出來て、之を切開せし爲めに顔の肉に缺陷が生したる時は、腿の肉など切りて顔の缺陷を補ふのてある、此場合ても切口の方を持つて來て合は

すればこそ肉が乗るので、外面の皮の方を附たのでは腐つてしまう、生物が生命を保つ所以の自然法は實に動かすべからざるものである、然れば寶珠形は理智不二の形、物心和合の形であつて、實在の生命は此形に宿り、法界の活動は此形に體現せられたものと云はねばならない

五　塔婆と人格

五輪塔の組立の理論は一應説明したが、是れ丈では現在吾人が五輪塔を塔婆として亡者の菩提の爲めに立て、又は開張供養落慶供養等に建つる理由が解らぬのである、故に管々敷いやうであるが以下少しく説明をして置く

謠曲の率都婆小町にこんな問答がある、夫は美人小町が老衰して見る影もなく瘠せ果てゝ、路傍の率都婆に腰打懸けて居ると、僧が來つて

僧　お事の腰かけたるは、かたじけなくも佛體色性の率都婆にてはなきか、そこ立ちのきて餘の所に休み候へ

小町　我も賤しき埋木なれども、心の花のまだ有れば手向になどかならざらん、さて佛體たるべき謂(いわれ)は如何に

僧　それ率都婆は金剛薩埵、かりに出現して三昧耶形を行(おこな)ひ給ふ

小町　云ひなせる形は如何に

僧　地、水、火、風、空

小町　五體五輪は人の體、何(なに)しに隔あるべきぞ

とある、即ち僧は塔婆は佛の三昧耶形なれば尊むべきもので、決して腰など打懸くべきものでないと云へば、小町はさるもの五輪塔は吾人と同體であつて是は塔婆だから、尊い人間だから卑いと別に隔つべきの理由がないと喝破したのである、斯くの如く説き來ると頗る了解に苦しむことゝなる、茲に塔婆と吾人の關係につき て少しく説明して置く必用が生ずるのである

塔婆は具には梵語の率塔婆 (stupa) で、元來は佛舍利を安置した建築物で、我國の廟とも云ふべきものである、此舍利安置處即ち舍利塔を建ると云ふことは、印度にては、非常に功德あることゝ信ぜられ、後に佛舍利の有無に拘らず塔を建るに至つたので、阿育王の如きは八萬四千の寶塔を建立したので有名である、後に此考が一般

に普及せられて、盛に堂塔を建立することになつたが、偶々密教は此塔形を宇宙を象徴した五輪塔に改めたので、此形が大に尊崇せらるゝこととなり、我國に來つて大に流行し、遂に亡者の墳墓ともすれば、追善供養の標ともなし、開張供養落慶供養等の時にも建つるやうになつたのである、我日本佛教中で淨土眞宗を除くの外は、皆此塔婆を立つることになつて居る、而して普通に云ふ所の塔婆の形と、石塔の形とは大に異るのである、故に密教では此五輪塔の形を三種に分ち

根本形の塔　三昧耶形　宇宙觀の象徴

五佛等形の塔　塔婆　五佛の形

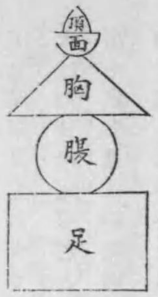
支分上形の塔　石塔　人間の形

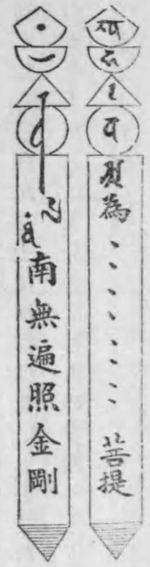
として居る、根本形の塔とは前章に說いた宇宙觀の象徴で、其形は上の三層と下二層は同量で寶珠形が比較的に大きい、五佛形の塔とは此五輪を空風火水地の五大となし、空大は大日如來、風大は阿閦如來、火大は寶性如來、水大が阿彌陀如來、地大が釋迦

根本形

五佛等形

支分上形





如來の五佛の形となしたので、五輪の分量が何れも等しいのである、率都婆小町の僧が、地水火風空と答へて居るのは此趣である、板や角柱で造る所の通俗に塔婆と稱呼せられて居るのは此形である、塔婆には五輪表に空風火水地と書いて五輪の裏全體に圖の如くの一字を長く書くのであるが、是は表は胎藏界の大日如來、阿閦如來、寶性如來、阿彌陀如來、釋迦如來で、裏は金剛界の大日如來一尊で、金胎不二を表して居る而して其下には亡者の戒名を書き、裏に南無遍照金剛と大日如來の金剛名を書き、迷悟不二の見地に立ちて亡者と大日如來と一體無二の深い〳〵理論を顯すのである、日本佛教の大半の僧侶は塔婆を嚙つて命を繫いて居るのであるが、こんな理論のあることは知らないで、禪

宗ては大圓鏡智だの妙觀察智だのと書き、日蓮宗ては南無妙法蓮華經と書き、淨土宗ては南無阿彌陀佛などゝ書いて居る、夫ては塔婆の上に五輪を刻む必用がない、刻んだらば刻んだ丈に取扱はないと、刻まれた五輪が甚だ迷惑をしてしまう、第三の支分上形とは支分とは吾人の身體のことて、此五輪を吾人の身體の形としたのてある、大日經には

阿字(地)は遍金色なり、用て金剛輪と作して下體を加持せよ、說て瑜伽座と名く、鑁字(水)は素月光ありて霧聚の中に在り、臍自り上を加持す、是を大悲水と名く、覽字(火)は初日の暉のごとく、形赤にして三角に在り、本心の位を加持す、是を智火光と名く、晗字(風)は刼災焰のごとく、黑色にして風輪に在り、白毫際を加持す、說て自在力と名く、佉字(空)と及び空點と一切の色を成すと想ひ、加持して頂上に在り、故に名けて大空と爲す。

とある、吾人靜坐すれば臍より下は地輪て、臍より上が水輪、胸が火輪、面が風輪、頭が空輪と云ふことになる、此趣を小町は五體五輪は人の體と喝破したのてある、僧は迷と悟と二なりと云ふ見地に立つのてあるが、小町は迷悟不二の理想に立つのて、一枚上と云はねばならない、此の如く觀じ來れば吾人は即ち法爾法然の五輪塔てある、吾人が五輪塔の自覺に到達すれば吾人は即ち實在を體現したのて、此體現は實に人生本來の活理想てある、密敎が實在を人格と見て是を大日如來と稱するのは此處に存するのてある、然らば人生は實在の生命てあつて箇性は實在の生命を顯す象徵てある、と云ふべきてある、吾人が此大自覺に入る時、今まて無意義に觀ぜられたる人生は忽然として無限の光明を放ち來たり、汚れたるが如く見ゆる吾人の人格は最高の尊嚴を發揮するのてある、世の學者が人間は萬物の靈長なりとか、人は神に似たりとか云ふが如き狹隘なるものてない、況んや人間を罪の子てあるの、六道の迷兒てあるのと云ふは以ての外てある、大日經には此消息を說て

此五字(前に說いた五輪の種字)を以て身を嚴れば威德具に成就せり、
一熾然の大慧矩あつて衆の罪業を除滅し、天魔軍衆等及び餘の障を爲す者當に此の如きの人は赫奕たるを金剛に同しと見るべし

とある、吾人が自己の尊嚴を自覺したるとき、天下何物か其赫奕たる光明に向つて

嘆美の聲を發せざるものゞ、父母所生身速證大覺位とは正に此時に得る境界なのである、自己曼荼羅の發現とは此時の趣である、五輪九字祕釋に宗祖興教大師は、自ら此の五輪の自覺を開きたる所以を述べて

三藏（不空三藏を指す）の曰く、余（不空三藏自稱）金剛智三藏に依て、此五字（即ち五輪）を傳て信を起し、之を修して千日に及ぶ、秋夜の滿月に於て忽然として除蓋除三昧（覺の境界）を得たり云々と、茲に依て弟子（興教大師自稱）此祕訣を聞くことを得て深く信じ、多年之を修して既に初位の三昧（覺の境界）を得たり、有信の禪徒疑惑を生ずること勿れ、若し鑁（興教大師自稱）が虛言ならば、之を修して自ら知れ、唯願くば一生をして空く過す勿れ

とある、然れば唐の不空三藏も金剛智三藏も此五輪の自覺に依りて、最高の人格を體得せられたので、我宗祖興教大師も此五輪の實驗に依りて實在の生命を握られたのである、興教大師の大文章たる五輪九字祕釋は此五輪の實驗の消息を說明したものである、近頃自己確立とか自己實現とか云ふことを聞くが、宇宙觀の根柢に立ちたる人世觀を得ずして、只社會の一員であるとか、共同生活が必用だとか云ふ薄へらな考から出發して、自己を確立したのでは、何等の價値ない自己確立である、こんな連中に限つてあゝ忙しい、あゝ金が欲しい、あゝ堪らないと叫びたがるものである、俳人一茶は

盥から盥に移るチンフンカン

と人世を茶化して居るが、生悟り連中は一茶に茶化されないやうに用心することが肝要である

六　人道の極致

宇宙の最高實在を認識して、人格の尊嚴を發揮すると云ふことは、固より容易の業でない、以下現實の社會に就いて如意寶珠の敎ゆる理論を談り讀者諸君と共に寶の生涯に進まう涅槃經には佛心とは大慈悲是なりとあるが、人道の極致なるものは即ち佛心の大慈悲である、法界の絕對愛の力である、換言すれば全く自己を棄て他を救ふと云ふことにある、彼の近松子の「天の網島」を見よ、天の網島の夫婦たる、夫治兵衞なるものは頗る遊蕩兒で、曾根崎の紀ノ國屋の小春と云ふ遊女にスッカリ迷ひ込んで、無分別にも小春と心中せんと企てたのであるが、治兵衞の妻おさん

が小春に、女は相見互、何うぞ切れぬ所を思ひ切りて良人の命頼む〳〵と云ひ送るや、小春はおさんの心根に感じて治兵衛を思ひ切つて、二十九通の起請文を焼き捨てたのである、所が後に治兵衛は我愛する小春が太兵衛と云ふ金持に受出さるゝと聞いて、恐らく太兵衛めが

それ見よ治兵衛は身代を使ひ果して、金に詰りて女に捨てられたと大阪中を觸廻り、問屋中の交際には恥を掻かねばならぬと思へば、私は胸が裂ける、身が燃ると涙を流して口惜がるを見て、妻おさんは大に同情して己の夫の體面を保たしめんと、我身の衣裳を一つ殘らず風呂敷に包みて

私や小供は何着いても、男は世間が大事、受出して小春も助け太兵衛とやらに一分立てゝ見て下さんせ

と云ふた、小春を請出して後に自身はどうなるかそんな考は無論ない、「闇つて置くか、内に入れるかしてから、其方は何となることぞ」と治兵衛に問はれて、始めて氣付き

左樣じや、ハテ何としよう、子供の乳母か、飯焚か、隱居なりとも致しませう

と、全く夫の爲めに自己を犧牲に供し去りたるのである、治兵衛も此神々しき絶對愛の體度には、實に慚愧に堪へないので

餘りに冥加が恐敷い、此治兵衛に親の罰、天の罰、神佛の罰は當らずとも、女房の罰一つでも、行末はようない筈、ゆるしてたもえ

と自覺したのである、此一刹那に於ける夫婦は、妻おさんは己の身のあることを忘れて夫の心を心として居る、是と同時に夫治兵衛は妻の心を心として、天の罰は當らずとも女房の罰が恐いと自覺したのである、彼の有名なる赤穗義士等は吉良上野介の首級を主君淺野内匠頭の墓前に備ふるや

元祿十五年壬午十二月十五日、只今面々名乘り申通、大石内藏之助御足輕寺坂吉右工門まで、都合四十七人進死臣等謹而奉告亡君之尊靈、去年三月十四日尊君、吉良上野介殿を刃傷之御事、私共不奉存其子細、然る處尊君御生害、上野介殿御存命、御公裁之上、我等共如此之企、尊君之御心に非ずして、却て御怒奉恐入候得共、我等共尊君之祿を食申、不倶戴天之儀難默止候、不可踏地之文無耻不可候、然而晝夜感泣仕候段、抱耻御果候共於泉下可申詞無之、因茲可奉繼御意趣と存候、之より此來

今日を御待申候事一日三秋の思御座候、四十七人之輩起雨躇雪一日二日一食仕申候、老衰之者、病身之者數々進死候得共、螳螂軟臂の笑をば招き彌々尊君之御恥辱を御遺可申歟と奉存候得共、不得已昨夜半申合、上野介殿御宅へ推參仕、則ち上野介殿御供申是まで參上仕候

此脇指は尊君昔御秘藏、我等へ被下置候、唯今返獻仕候、御墓下御尊靈有之に於ては、再び御手向被下御欝憤を遂げ給へ、右之通四十七人一同申候。

と云ふて居る、決して我等が敵を討つたとも、御欝憤を御晴し申したとも云はない、四十七士の心中には主君あるのみて、吉良上野介もなければ、敵を取つたと云ふ事實もない、只主君の淺野内匠頭自身に「欝憤遂げ」させたと云ふに過ぎない、全く四十七士は自己を主君の爲めに犧牲に供して居る、換言すれば主君と位置を轉換して居るのてある、此考が實に千古に卓絶した點て、忠臣の鑑なり義士の手本なりと呼ばるゝ所以てある、聖釋尊は因位には身を餓虎に施されたと云ふが、西郷南洲は「笑を以「微軀」附「子弟」」とて全く其志てない叛徒ともなつて居る、南洲の偉大なる點は此處に存するのて、此犧牲的精神あればこそ、始めて明治維新の大偉業を成就することが出來たのてある

然り而して此人道の極致を談るものは如意寶珠てある、元來如意寶珠は理智不二物心和合の形てあるが、其三角及び半圓の原形を尋ぬれば、第十八頁に說いた如く三角は胎藏界方形の半形て、半圓は金剛界圓形の半分てある、然れば寶珠の上部の三角が胎藏界て、下部の半圓が金剛界てあらねばならない、然るに此三角半圓の二形が寶珠の一形に和合すると是れが全く正反對になつて

寶珠（上部三角　金剛界　差別　智　心　折伏　武　陽　男）（下部半圓　胎藏界　平等　理　物　攝受　文　陰　女）（不二）

と云ふことになる、是は頗る背理のやうに思はるゝ人もあらうが、此全く位置を轉換することが生物の生物たる所以てある、或る學者は自然と人世が互に相衝突して人間が自然を破壞して居るやうに說くのは、此消息を解せぬからてある、此人生觀を得て吾人は始めて自己確立に出發すべきてある

七　男女の別

東洋の道德は竪の關係を根柢となし西洋の道德は横の關係を基礎として居る、竪の關係とは親子、君臣、と云ふが如きもので、横の關係とは夫婦、朋友と云ふが如きものである、子は親に對して孝、臣は君に對して忠、忠孝は實に東洋道德の根柢である、夫婦の愛、社會の幸福と愛と幸福是が即ち西洋道德の基礎である、故に我國では妻を去つても親に孝行せねばならぬので、假に妻と父とが共に水に溺るゝとせば、第一父を救ねば親不幸として排斥せらるゝのである、俗に親子は一生、夫婦は二世と云ふやうなこともないでもないが、忠孝の前には屢々夫婦の愛の如きは犧牲に供せらるゝのである、吾人は今日に行はるゝ竪の關係を基としたる道德に對して異議を挾むのではないが、是と同時に横の關係に就て尙十分の注意を拂ふて貰いたい、換言すれば父子の孝と同時に夫婦の愛をも尊重したいのである

近頃、英國では婦人の參政權運動が常軌を逸する迄に猛烈となり、我國でも女の自覺と云ふやうなことが流行して、遂に、新い女と云ふやうな變り物が出來た、平塚明子の主張なるものを見るに

元始、女性は實に太陽であつた、眞正の人であつた、今、女性は月である、他に依つて生き、他の光によつて輝く、病人のやうな蒼白い月である

と、女性の現位置を悲み、遂に

一たび目醒めたものは、もう二度と眠ることは出來ない、私共は生きて居ります、目醒めて居ります、內なる生命は何處かしらに放散させねば生きてゐられません、どんな壓迫があらうとも、新しき生命は其出口を見出して止みません

と呼び、女子の自由解放を論して、

多少なり個人として自覺した現代の婦人は、今迄男子から、又社會から强制せられた服從、貞淑、忍耐、獻身等の所謂女德なるものを最早有難いものだとも何とも思へなくなつて居ります

新しい女は、最早しいたげられたる舊い女の歩んだ道を默々として、はた唯々として歩むに堪へない、新しい女は、男の利己心の爲めに無智にされ奴隷にされ肉塊にされた如き女の生活に滿足しない、新しい女は男の便宜のために造られた舊き道德、法律を破壞しやうと願つてゐる

と全く社會の秩序其物すら破壞しても顧みない、凄い主張である、

然るに一方には女性を全く男性の從屬たらしむる、幼にしては父に從ひ、嫁しては夫に從ひ、老いては子に從ふと云ふ極端の說もある、そんな古るめかしいことは兎に角、現在男女の爭はれぬ事實上の差異は、性徵の區別で、

第一生殖機能の差異

第二身長の差異

第三體量の差異

第四體質の差異

此等の差異の結果、人類の歷史上到底女性は男性に及ばないことを證明して居る、否な進化論者の說に依れば、下等動物の昆蟲類にありては雌は雄よりも大なるもの少からずして、コンドラカントの如く、雄は雌の卵囊の邊に寄生するものすらあるも、高等動物の鳥類獸類に至りては、殆んど雄は雌よりも大と美とを有して居る、然らば人間の男女の差異と云ふものは、一朝一夕の偶發的のものでなく、過去何億萬年の間、互に雌雄淘汰して今日あるを致したものであるとのことである、之を支

那流に云へば夫婦の婦の字は、女が帚木を以て掃除して居ると云ふ意であるから、夫は床前にチャント座し、女は臺所の隅に小さくなつて居るのが當然であると云ふのであらう、併し何れも極端と極端で中庸を得たる說ではないやうに思ふ、密敎の意から之を見れば、金剛界は慧德陽性で、胎藏界は定德陰性で、金剛界胎藏界は固より不二であるから、胎藏界が輕い金剛界が重いと云ふことはない、甲乙なく勝劣なく平等々々である、併し之を差別的見解に落在せしめて見れば、金剛界は天曼荼羅で、胎藏界は地曼荼羅である、即ち陽性は浮き陰性は沈むの理だ、其丈では頗る漠然であるが、金剛界曼荼羅の定德の十六尊と慧德の十六尊の關係を見れば、男女の關係は頗る明かとなるのである、上の第十五頁の圖の如く、大日如來は帝王、東方阿閦如來、南方寶性如來、西方阿彌陀如來、北方釋迦如來の四如來は四方の大總督で、此總督の四方に各四菩薩がありて十六の菩薩となる、是が行政長官、司法長官、敎化長官、實業長官の格である、此十六大菩薩は男性であるが、之に對して女性の四波羅蜜菩薩と八供養菩薩と四攝菩薩の十六大菩薩がある、四波羅蜜菩薩とは大日如來の傍に侍する金剛、法、寶、羯磨の四波羅蜜菩薩で、此菩薩は先づ宮內省官吏と云ふ格で、帝

王に常侍輔弼の臣である、八供養菩薩中、內ノ四供養の嬉戯、華鬘、歌詠、妙舞の四菩薩は、帝王の大日如來が四方の總督の阿閦、寶性、阿彌陀、釋迦の四如來を供養せんが爲めに出立した菩薩で、外ノ四供養の燒香、散華、燈明、塗香の四菩薩は、四方の總督が帝王の大日如來を供養せんが爲めに出生した菩薩である、四攝の鉤、索、鎖、鈴の四菩薩は、四方の門衛あると同時に迷ひの境界に居る吾々を悟の境界に呼込む役である、然らば總督と云ふやうな司令官は勿論、一省の長官となるべき人は男性で、侍者役とか御給仕役とかが呼込役とかが女性と云ふことになる、男性は外に働き女性は內を守り、男性は理的行動、女性は情的行爲と云ふやうな順序で、易經に女は信を內に正ふし男は信を外に正ふす、男女正しきは天地の大義なりとあるも能く協ふて居る、即ち男の働きと女の働きと其方面を異にして、而も相依り相助けて始めて完全なる社會を組織することが出來のである、一枚の紙にすら表裏かある、表の表たることを得る所以は裏があるからで、裏か裏たる所以は表があるからである、表だから尊い裏たから卑いと云ふ理合はない、女子が內を守るが故に卑しく、男子が外に働く故に尊いと云ふ理はない、男尊女卑と云ふことの非なると同時に、女尊男卑と云ふをも僻事である、此理を知らずして女子の自由解放を叫び、女子が全く男性的行動を敢てするを能事として、其美を捨てんとするが如きは、自然の理法に背きたるのみならず、一枚紙を表のみ存せしめんとすると同いことで到底出來ぬ相談である、寶珠の陽性たる三角の尖が上方にあり、陰性の半圓が下方にあるもまた此理に外ならぬのである、圓い形が二つ依つても寶珠形とならねば、三角が二つ依ても寶珠形とならぬことに着目すべきである

九　夫婦の愛

夫婦の愛は人倫の根元である、此愛なるものは最も神聖にして一點の私なきものである

君子の道は端を夫婦に發す其至れるに及んでや天地に察かなり

と古聖人は云ふて居る、佛教の多くは夫婦に就いて注意を缺いて居るのであるが、幸に密教は此點に留意し、寶珠の形は此神秘を談つて居る、西洋の道德は夫婦の愛を根柢として居るから、之に就て種々の研究をもして居る、アービングは

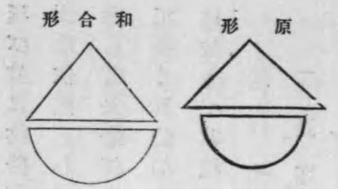
女性の一生は戀愛の歴史のみ、情は其棲める世界にして、其捧げんとする希望も、其得んとする希望も皆此外に出でず

として、女性は戀愛の結晶の如く考て居る、理論は兎に角事實の戀愛は所謂見惚れ氣惚れ底惚れて、二十臺の人は容貌の美に惚れ、三十歳となれば其氣性に惚れ、四十歳以後となれば凡ての點を綜合して此に惚るゝのである、進化論者は此戀愛なるものを多くは種類の蕃殖の自然的の衝動となし、自然派の文學者も此戀愛なるものを肉欲と同一視して居るやうである、固より戀愛は肉欲と沒交渉ではないが、肉欲直に戀愛と云ふが如き淺薄のものではない、精神的の美しき心が主となつて生じたる戀愛が眞の戀愛で、此の美しき心が主となればこそ

劍太刀もろ太刀の利きに足ふみて死にも死になん君によりては

と云ふが如き、熱烈の情ともなるのである、人間は一面に動物的衝動の存する事は事實であるが、茲に人間として幾萬年の訓練の結果、單に肉欲の要求によりて死を恐れざるに至るものでない、故に多くの學者は戀愛は複合感情の結果であると說いて居る、複合感情であれば、同一模型に入れて之を律する譯には行かない、茲に戀は曲者だと謠はるゝに至るのである

扨て戀愛は夫婦成立の主要部分であるが、戀愛即ち夫婦の愛でない、密教は此夫婦の愛を說いて敬愛と云ふて居る、抑も敬とは敬虔、敬禮、恭敬なぞと續く字で垂加流の神道では此敬と云ふことを神臆として居る、敬とは己をつゝしむことで、愛とは人を愛することである、夫となりては己を敬慎して妻に滿腔の愛を注ぐべきで、妻となりては渾身の愛を捧げて夫を敬慕すべきである、禮記に禮は夫婦を謹しむに始まるとあるも此處である、敬愛は即ち寶珠の形である、元來寶珠の形は陰の方形の折半の三角と、陽の圓形の折半の半圓との和合形である、所が能く考へて見ると同じ一尺立方の圓と方の半形を合するとすれば、一尺の圓の半形は其切口が矢張一尺であるが、一尺方形を三角に切れば其切口は一尺四寸一分四厘二毛餘となる之を二つ合せたからとて寶形は出來ぬのである、是が寶珠形となるには互に其角を讓り合ふて、茲に格好よき形となるのである此時に於て半圓は其切口横に開きて三角は其切口を收縮して縱に



延び茲に陰陽和合して一の形となるのである、されど三角は依然として三角に、半圓は依然として半圓で、決して其格好を崩さないのである

然らば夫婦相抱く時に、陰は横に開き陽は縱に延び、兩性の神祕は茲に發揮せられて全く異體同心の一體となるも、互に敬して愛を忘れず愛して敬を失はず、妻は夫に依りて其境域を擴大し夫は妻に依りて其限度を延長すべきである、興敎大師は

迷則生死　結生根本　悟則佛法　法性源底
二滴即是　蓮華理智　二心亦復　金剛定慧
和合肉色　入胎識支　是謂兩部　互有不二
此二色心　總聚一體　即是南方　平等薩埵

と仰せられてあるが、夫婦の肉欲の衝動も、自覺の境界に達したらんには決して疎んずべきものでないのみならず、此戀愛が即ち蓮華の理智、金剛の定慧である、此處が密敎が他の顯敎と頗る其趣を異にして居る所で、密敎が修法を四種に分類して敬愛を其一とする所以である、然らば夫婦の道は敬愛に依らねばならない、サイラスは

有德なる婦人は良人の命に從て却て良人を左右すると喝破して居るが、互に此滑て和合したいものである、然るに世の俗人共は敬を忘れて互に愛のみを要求するのであるから、寧ろ我儘のみ募りて遂に破鏡の嘆に陷るのである、米國の如き突飛の國にありては、山の神は打寄りて良人操縱倶樂部を設立し、宿六は細君統御倶樂部に集りて痴話を繰返し居るとのことだが、如何に愛のみ要求するの結果に弊害があるかと云ふことは、此一事でも略察せらるゝのである、西洋人は吾々文明の國には實に離婚數が少いとて大に誇て居るが、事實は夫婦の形式のみに拘泥して、單に法律のみ上夫婦となつて居るものも少くないやうである、ノラなどの自由戀愛と云ふやうな說も、此等の弊害に出發したのであるまいか、故に西洋の如く形式のみに拘泥して表面を裝ふたからとて何の役にもならない、吾人は寧ろ夫妻は赤裸々に其愛を語り、其情を運ぶのである、即ち夫の苦む所は妻の嘆く所、妻の悲む所は夫の憂ふる所となり、互に寶珠の三角と半圓の讓り合を實現せられたいものである、壺坂靈驗記のお里の語て云へば

如何ほど苦勞爲やうとも、私の體はお前の體も同じこと、何の遠慮が要るものか

とありたいものである

十　處世の訣

近頃、自己確立だの主我實現だの、自己向上だの、自我發展だの、と云ふ語が流行して青年の間には大に歡迎せられ、何んても自分の說のみ主張して他を壓倒し勇往邁進しさへすればよいやうに考へて居るものがある、是は大に間違つた考てある、自己の爲めに自己以外のものを犧牲に供するならば其自己なるものは全く不正義な利己的なものであつて、實に危險極る思想と云はねばならない、眞の自己確立なるものはそんな狹隘なるものではない、即ち自我の權威を認め自己の尊嚴を保つと共に、自己以外の權威と尊嚴を認むるのである、西諺には、汝自身を知れと云ふて居るが大日經には其趣を說いて

如實知自心

とある自分自身が此世に存在する根本義を知るのである、換言すれば自己の赤裸裸の本源を自覺するのである、此自覺を得、始めて自己なるものが赫々たる光明を發するのである、我祖興敎大師は此自覺に到達せられたる趣を說いて

白淨信心とは淨菩提心なり、是れ則ち如實知自心なり、竪には十重の淺深を顯し、橫には塵數の廣多を示す余、（興敎大師自稱）國を出てし時の如きは、三毒の罪業羝羊の妄想に任せば三途八難に墮つ可し、實の如く自心の惡業を知つて、無明の父母の家を別れしより已來、更に名利の心を捨て、深く無盡莊嚴藏恒沙の己有を信ず、是則ち一重の如實知自心なり

と云ふて居る、即ち自己の無盡莊嚴藏の廣大の權威を認められたのである、此自己曼荼羅の顯現ありて茲に森羅萬象は全く自己の所有に歸するので、此境界に達して始めて自己の權威は發揮せられ、水火も侵すべからず、威武も屈すべからざる體度に出るとが出來るのである、元來人と云ふ字はノ丶の二劃が相依つて成立て居るで、ノ丈でも丶丈でも立つことは出來ない如く、人世と云ふものは互に持つ持れつして出來上つて居るのである、昔は此の共同生活が頗る單純のもので、喩へば昔は出產をしても多く自身で萬事を片付けたものたが、後には只產の經驗のある老婆が產の當時丈助けたものである、然るに今日では相當の學

識を有する助産婦が出來て、懷姙の時から種々と世話をして居る、交通上のことにしても昔は旅は一人てテク〳〵歩いた者だが、今ては汽車て車掌、機關手、火夫、給仕と云ふやうに多數の人の共同の力に依つて旅行して居る、文明が進めば進む程共同生活は複雜なる關係を以つて來る、然らば互に人が相依り相助けると云ふことが多ければ多いほど、社會の進歩てあると云はなければならない、此共同生活の關係が日一日に複雜になれば成る程、吾人は社會の一員として之れに對する責任が重くなり來るのてある、

時計と云ふものは表には二本の針しか無い、併し其裏には澤山の機械がある、大きな輪もあれば小な輪もあり、短い針もあれば長い針もあり、彈條もあれば柱もある、其中て小な針だからとて一本拔いて捨つれば、時計は直に止まつてしまう、小な針だから必要が少い大な輪だから必要が多いと云ふ譯てはない、互に其處にあつて其處にある丈の用をなして居るのてある、世界十五億の人口から見たらば、自己一人は蒼海の一粟に過ぎない、實に微少なものてある、併し其一擧一動は社會全體に影響するのてある、社會は有機體てあると云ふが、實に微妙の働きを持て居るものてある

さて此社會に處して吾人は如何に自己を發展せしむべきてあるか、古歌に

圓くとも一角あれや人心
あまり圓きはころび安けれ

と云ふことがある。一角は自己の主義主張て、社會に對して圓滿に交際するのが圓い方てある、主義主張は飽まて猛烈に深刻に、寶珠の三角の尖端が能く物を破るが如く貫徹せなければならぬ、併し是と同時に他と調和し得るやうに圓滿にせなければならない、此寶珠の圓い方と三角の方との使ひ分けが、處世の上に最も面倒なことてある、矢鱈に三角の方許り出して居ると、彼人は角の取れない人だ、交際惡い人だ、自分の云ふことのみ通さうとするえだと、非難せられるし、又圓い方丈を出し居ると、彼人は圓る過ぎる、お人好だ、愚圖だ、間拔だと笑はるゝのてある、實に此調和が處世の一大要訣てある、若し夫れ幸にして、吾人の心をして寶珠の夫の如く持つことが出來たならば其人は交際場裡に靈腕を有する人て、遂に自己の欲する所成らざるはなきに至るのてあらう、大日經には

淨菩提心如意寶は、世出世の有ゆる希願を滿す

とある、あゝ吾人の處世は寶珠なる哉寶珠なる哉である

十一　國家の教

寶珠を國家の上に就て考えて見よう、近頃國家の統治權の主體は國家自身であつて、君主は統治の力を有するのみであると、美野部博士は

問題は唯「天皇國を統治す」と云ふことを、國法學の法理に於て如何に解說するを正當とするかの點のみに在る、統治の力が君主に存することは固より云ふまでもないが、此統治の力は其法理上の性質に於て「權利」と見るべきものであるや否や、君主が統治の權利主體と見ることが、法理上果して正當であるや否や、國家の法理上の性質は如何に見ることが正當であるや、見解の分るゝ所は唯是等の點のみに在る、余は君主の統治の大權は權利の性質を有するものでなく、法學上の語を以て言へば「權限」であると信ずるのである、君主が統治の權利の主體なりと見ることは、國法學の法理に於て正當でないと信ずる者である。

と主張されて居るが、斯は歐洲の國法學の國家なる定義を其儘に、我國にも當嵌めんとするものであつて、頗る當を得たものでない、我國では統治權の主體が萬世一系の天皇に存する所が、全く他に比類のない國柄である、歐洲の國法學者の定義は、歐洲各國の國家には當嵌め得るも、我日本國には當嵌たることが出來ない、頗る不完全な定義であると信ずるのである、我密教より觀れば寶珠の上端が即ち君主で、

其君主の力の擴大せられたのが國家の力である、然り而して國家は國民と君主の關係を定むると共に國家經營に就て、政教の關係を明にせねばならぬ、我國の古代は政の字がまつりごとと發音せられらるゝことも明なるが如く、全く祭政一致である、後に祭政は分離せられたのであるが、萬世一系の天皇陛下を頂ける我國體を永遠に持續せしめんと欲せば、是非共宗教の力に依るの外はない、近頃宗教に就て少し理解したやうなことを云ふ連中は、歐米の國家が皆宗教の力に俟つことが多いから、我國も大に宗教に留意すべし主張するが、是が聊の間違てある、元來日本が世界無比の國體なるは日本が天皇宗とも云ふべき宗教の力に依るものである、佛教が我國に渡來して此國

體と如何にして調和せんと非常の苦心を以て試みたるものてある、其第一の成功者は云ふまでもなく聖德大子て十七憲法は其成文律てある、其後行基菩薩が本地垂迹を唱へ、傳教大師は守護國界章を著し、弘法大師は鎭護國家の祕法を傳へ、榮西禪師は興禪護國論を作り、親鸞上人は王法爲本を叫び、日蓮上人は安正立國論を述る等、各宗の祖師が如何に我國體擁護の爲めに苦心せられたるかを知るべきてある、換言すれば今日我國に存在する佛教なるものは國家的に發達し來りたるものてある、故に此國家的に發達し來りたる日本佛教を國家が疎外せんとするが如きことあらば、开は國家が自滅せんことを企つるのてある、歐化主義の盛なる、比日本人種を改良して白色人としなければならぬと唱へたものがあつたが、我國が佛教を疎外するのは是と同一筆法て、國家自身の自殺的論法てある、明治維新の建造者は思茲に至らず、佛教の表面に顯れたる弊害のみを見て、其根柢に存する思想を知らない、角を矯めて牛を殺して居る、實に國家の爲めに吾人は痛恨長大息に堪へないのてある、若し我國民が此點に於て自覺することなく、國家思想の根柢に觸れずして、歐米の宗教政策は此の如しとか、教育は絕對に宗教を排斥すべしとか、皮相見のみに住して、國家を經營すること百年せば、皇道は漸く廢れ國威は益々衰ふるのみてある、人は宗教の信仰ありて始めて水火も侵すべからず威武も屈すべからざるに至るのてある、國家が宗教的信仰なく昨是今非の理論のみに依りて存立し得るものてあらうか、若し夫れ我皇室の尊嚴を理論の力に依りて維持せんことを企つるものあらば、人情を忘れて權利義務に依りて親子の和樂を維持せんとするよりも尙難いことてある

十二　崇拜の對象

上來說き來りたるが如く、無量無邊の深義を此寶珠一夥に藏するのてある、故に古來此寶珠の崇拜は密教以外にありても多く行はれたものて、華嚴經二十八には

大摩尼寶珠に十事あり、能く衆生に一切の寶物を與ふ、何等をか十と爲す、一には大海より出つ、二には匠を加へ治を加へ、三には轉た精妙、四には垢穢を除く、五には塋練治す、六には衆寶莊嚴、七には貫くに寶縷を以てす、八には瑠璃の高柱に置く、九には光明四照す、十には王の意に隨て衆寶物を雨らす

と說き、大智度論には

或る人云く、此寶珠は龍王の腦中より出づ、人此珠を得れば、毒も害すること能はず、火に入るも燒くこと能はず、是の如く等の功德有り

有る人言はく、是帝釋執る所の金剛用なり、阿修羅と鬪ふ時、碎けて閻浮堤に落つ

有る人言はく、諸の過去久遠の佛舍利、法の滅盡するとき變じて此珠を成す、以て衆生を益す

有る人言はく、衆生福德因緣の故に、自然此珠有り

と四說の異を列らね大日經疏には

猶如意寶の石礦の中に在て、世人識らざるを以ての故に、棄て衢路の間に在り瓦礫と異ることなし、然るを寶を別つる者は、微相あつて纔かに影の外に彰るゝを見て、即ち之を識つて先づ利鐵を用ひて鈍石を鐫り去り、既に寶王に近きぬれば、其石漸く爽かなり、復諸藥を以て之を食ふて、礦穢をして消化せしめ、而して復た其質を傷らず、爾の時に麁垢已に除て尙細垢あり、既に洗ふに灰水を以てし、磨くに淨壘を以てし、種々の方便をもつて之を塗發す、既に光顯なることを得れば之を高幢に置て、能く一切の所求に隨て普く衆物を雨らす、爾の時に世人奇特の想を生し、是寶を尊重すること、猶ほ大天の如し、能く希願するを充滿するを以ての故に、然して此寶は一時の間に於て普く衆心に應じて、其所得に隨て各々差別あり、然れども此衆物は寶の中に於て先より有りとや爲んや、先より無しとやせんや、若し先より有りとせば即ち此の珠に何ぞ能く頓に衆物を藏せん、若し先より無しと云はゞ又何ぞ能く頓に衆物を雨らすや、即ち此の世間の寶性すら、已に不可思議なり、何に況んや、衆生の菩提心の寶をや

と云ふて居る、之に類する說を經軌輪釋から集めたら、尙幾十種あるのであらう、こんな譯で一般世俗には寶珠を拜めば七珍萬寶立どころに湧くと信じられて居るので、寶の王として神棚に祭られ、高麗犬の頭に載せられ、苟も緣起よい所には必ず崇められて居るのである

併し吾人が寶珠を崇拜せんとするものは、別に深き一の根柢が存するのである、抑も大聖釋尊印度に出現せられて、此大乘微妙の法門を說述せられ、沙羅双樹の間に入滅せらるゝや、其佛舍利を八ヶ所に分骨したのである、此舍利が其遺第に依つて

第一に崇拜せられたのである、其次に起つて來たのが佛法僧の三寶の崇拜で、即ち佛は卍字、法は輪、僧は蓮華を以て象徴せられてある、此三寶の崇拜が轉じて佛身の崇拜となりたるものである、釋尊が入寂せられて、直に金色の佛身が崇拜の對象物となりたりと思惟せば、开は歴史を知らぬ誤りである、佛は卍字、法は輪、僧は蓮華の象徴が密教に來りては佛寶は佛部となり、卍字は寶珠となり、法寶は金剛部となり、輪は同じ摧破の義ある金剛杵となり、僧寶は蓮華部となりて同じく蓮華を其象徴物即ち三昧耶形として居る、故に金剛界禮懺並に胎藏界禮懺の初に一切恭敬敬禮常住三寶と云ふのである、此原始三寶の象徴が密教の三部の象徴と轉化することは、胎藏界曼荼羅を研究すれば其經路は明に知らるゝのである

扨て若し茲に人ありて、佛教崇拜の對象は餘りに多過ぎるから、原始佛教の崇拜の對象物に復歸せんと企つるものありとせんか、云ふまでもなく、佛舍利其物であらう、然り而して密教は此佛舍利と寶珠と同一物であるとなすのである、高祖弘法大師は御遺告に

夫れ以みれば如意寶珠は、是れ無始より以來、龍肝鳳腦等に有るに非ず、自然道理如來の分身なる者也

とある、故に密教道場の秘密壇上に安置して崇拜の對象たらしむる寶珠は、佛舍利を其中心に凝むるのである、世人が密教は萬有神教の趣を極端に發揮して、鰯の頭も信心柄と云ふやうな調子で、餘りに亂雜過ぎると難じたり、密教者自身も時に安立無量乘とは云へ、餘りに崇拜の對象が多きに失し、殆んど適從する所を知らないなどと歎息するものがある、此時に當つて吾人は如意寶珠の崇拜を大に叫ばずんばあらずである、尚一重の深義は次章を讀んで知るべきである

十三　寶の主

如意寶珠は願のまに〳〵七珍萬寶を雨らすと信ぜられて居る、眞陀摩尼の光明は一切衆生の困苦災患を照破し去ると思はれて居る、寶珠のみ何故に七珍萬寶を雨らして吾人を救濟するやと云ふに、佛教で說く刧跋の喩に、一刧の時とは、四千里四方の大きな倉庫に芥子を一杯詰込みて、百年に一粒宛取り出し其盡くる時を云ふのであるとのことだ、四千里は愚か一萬里が百萬里の倉庫でも、後から補充しない

て之を引出したらば、必ず何日か盡る時が來るに相違ない、然るに鐘と撞木との和合から鳴る鐘の音は、幾千年立つたとて盡くることがない、奈良の大佛の鐘は聖武天皇の時にゴーンと撞いたのも、大正の今日ゴーンと撞いたのも、更に變ることなく今後幾百萬年立つても、恐らくは鐘の音は盡きまいと思ふ、是が寶珠か物心二の和合形、理智不二の和合形であるから七珍萬寶を無盡藏に雨らす所以である

併し以上の說は淺略の說である、寶珠は尙一層の深祕を有して居る、抑も金剛界は智差別折伏門で、胎藏界は理平等の攝受門である、之を印契で顯す時は、金剛界は四種拳が印母で、拳固を堅く握り、胎藏界は十二合掌が印母で、掌を軟く開く、いざ承知ならぬと云ふ時になると人は拳固を堅めるが、此子は可愛いですと云ふ時は掌を開いて撫ぜてやると同い道理である、故に金剛界の大日如來は智拳印とて、拳固二つを胸の前に重ねてござるが、胎藏界大日如來は法界定印とて、掌を自然の儘に膝に重ねてござる、處で大日如來の全體を寶珠の形として觀察すると、金剛界大日如來は智拳印を結んでござる爲めに腕を張ることになるから、腕から以上が三角形をなして、全身から云へば三角の部分が多くなり、胎藏界大日如來は法界定印を結

胎藏界大日如來　　金剛界大日如來　　弘法大師

ぶが故に腕が圓形をなして、全身から云へば半圓形が多くなるのである、前に寶珠の三角は金剛界で半圓形は胎藏界であると云ふたが、其深祕は茲に至つて解決せられて居る、然るに高祖弘法大師は、右の智手には五股金剛杵を持ちて胸に置き、左の理手には念珠を持つて膝に置いてござる、即ち金剛界の大日如來を右手で代表し、胎藏界大日如來を左手で代表せられて居る、是れ金胎不二の寶珠形である。

宇宙を一大人格と見て、之を大日如來と名けたのが密敎の最も勝れた所である、實在か夫自身に物質と精神を有すればこそ、常恒不斷に眞理を開示するのである、宇宙が一大人格であればこそ、始めて夫自身進化發展することが出來るのである、近頃になつて社會は有機體であると云ふやうなことを大層らしく云ふが、豈に

夫れ社會のみならんやである、彼法如意輪次第に其趣を說いて

舍利變じて如意寶珠と成る、此自然道理の如來分身、維れ眞實の如意寶珠也、或時は善風を出して雲を四州に發して、萬物を生長せしめ一切衆生を利益す、水府陸地の萬物誰か利益を蒙らざらんや、或は又無數の色光を放つて、遙に泥犂(地獄)の底を照す、受苦の衆生斯の光明に遇て拔苦與樂す、是れ大日如來の本誓の身也、又光の中に無數の寶玉を雨らして、一切衆生の願樂に隨て二世の財寶を與ふ、是れ龍宮並にウ一山の寶珠及び東寺の佛舍利と一體無二なり、兩部界會の諸尊聖衆前後に圍繞して以て眷屬と爲る

金剛界胎藏界兩部海會の諸尊聖衆が、此如意寶珠を圍繞守護し給ふと云ふのは、寶珠が大日如來の本誓身であり、摩尼が宇宙全一の妙實在であるからである、然らば萬有の無盡無盡の莊嚴藏は寶珠の體現で、萬像の眞善美は摩尼の光明で、即ち寶珠は法界を生する寶の主である、此の悠久の人生は眞に寶珠の溫き懷に抱かれて生々滅々して居るのである、三世の諸佛十方の菩薩が此寶珠を髻中に頂くと云ふも、一切諸佛菩薩は皆此の寶珠より出生し給ふと唱ふるも、密敎最極深祕の大法は此如意寶珠を拜むとするも、此寶の主たる消息を洩したに過ぎぬのである

十四　國家の大法

寶珠は宇宙の妙實在である、實在に向つて敬虔の信仰を捧ぐるもの即ち宗敎である、密敎は此の實在に向つて最も莊麗なる儀式を行ふて、敬虔の信仰を發揮するのである、之を國家的に修行するものが、即ち宮中後七日御修法で、己人的に實證するのが後夜念誦法である、抑も後七日御修法と云ふは、宮中では每年正月の元旦より七日迄の間は、四方拜元始祭等の古代よりの儀式があるから、七草日が終りて、八日から宮中の眞言院に祕密祈禱が開始せらるゝのである、此法は弘法大師が一世一代の希望に依て、承和元年十一月、仁明天皇に上奏せられた、其文を擧ぐれば

承和元年十一月乙未、大僧都傳燈大法師位空海、上奏して曰く、空海聞く、如來の說法に二種の趣あり、一には淺略趣、二には祕密趣、言はく淺略趣とは諸經の中の長行偈頌是れ也、祕密趣とは諸經の中の陀羅尼是れ也、淺略趣とは大素本草等の經に病源を論說し藥性を分別するが如く、陀羅尼祕法とは文に依て藥を合せ服食

して病を除くが如し、若し病人に對して方經を開き談ぜんか、病を療するに由なし、必ず病に當て藥を合せ法に依て服食して、乃ち病患を消除し生命を保持することを得るが如し、然るに今講じ奉る所の最勝王經は、但々其文を讀み、空しく其義を談じ、曾て法に依て像を畫き壇を結び修行せず、甘露の義を演說するを聞くと雖も、恐らくは醍醐の味を嘗むることを闕かん、伏て乞ふ自今以後、專ら經法に依て經を講じ、七日の間、將に解法の僧二七人、沙彌二七人を擇んで、別に一室を莊嚴し、諸尊の像を陳列し供具を奠布し眞言を持誦せしめんとす、然らば則ち、顯密兩教如來の本意に契ひ、現當の福聚諸尊の悲願を獲ん

是れ密教の理想を國家的に修行せんことを奏請せられたのである、然るに仁明天皇は叡感斜ならずして、同年十二月廿九日

一室を莊嚴し別に修法せしめ、同く國家を護持し、共に五穀を成就せしむべし

との勅許せられたので、翌二年正月八日より十四日に至る迄の間、勘解由司廳に祕密道場を搆へて、鎭護國家の活理想を實現せられた、此修法は其後一千八十年、時に隆替ありと雖も、連綿今日に及び、今も眞言宗の根本道場たる西京の教王護國寺（東寺に修行せられ、恐れおほくも天皇陛下より勅使參向せられて御衣の御下賜あり、結願となれば東寺長者は東上參內して御衣を奉還し、遙に玉體加持を申し上げて居る、此の如く後七日御修法は密教の最極深祕の大法であるが、抑も何を拜むのであるかと云ふに、即ち寶珠の理想を活現するのである

淺略には如意寶珠、國內に萬寶を雨らすとするも、深祕には、室生山寶珠と本尊寶珠と壇上寶珠と無二と觀し、進んで壇上の如意寶珠と玉體と國家と無二無別なりと觀し、遂に森羅萬象も一天萬乘の君も百萬の蒼生も皆如意寶珠たらんことを祈願す、即ち天地は如意寶球の如く天災地變なく五穀豐饒ならしめ、君は如意寶珠の萬寶を雨らすが如き仁政を施き、民は如意寶珠の萬寶を生ずるが如く心と物との貢を奉らんことを祈禱す、（祕密辭林後七日御修法の條）

之を一層詳しく說かば、後七日御修法には祕鈔問答鈔に、金剛界種子𑖮、三形如意寶珠、胎藏界、種子𑖮、三形如意寶珠とある如く、金剛界大日如來と胎藏界大日如來とが寶珠の三昧に住し給へるを本尊とするので、其修法壇上に師資嫡々相承し來れる佛舍利を安置し、祈禱するのである、此本尊大日如來と壇上の佛舍利と大和國室生

山に秘密に埋められたる、大日如來より嫡々相承の如意寶珠とを、一體無二なりと觀念し、此寶珠が三千大千世界に擴充し、また收りて壇上の一夥となり、更に進んで此寶珠は天皇陛下の御璽にして、御璽即ち陛下の玉體なりと觀するのである此三は三にして一、一にして三、而して天皇陛下寶珠の三昧に住し給ふ時は、自ら仁政にて萬民皆快樂、茲に國家安泰にして國光内に輝き國威外に揚るのである、即ち天皇陛下の玉體と我日本國家と我國民とが三にして一、一にして三、是を玉體安穩、天下太平、萬民豐樂と密教者が口癖に云ふのである何故に天皇陛下が寶珠の三昧に住し給はねばならないか、何故に國家が寶珠とならねばならないか、何故に國民が寶珠とならねばならないか、少しく茲に辯を費やす必用がある、抑も我國は世界に比類なき萬世一系の天皇を現神として戴いて居る、是は神代の昔より今日に至るまでの皇祖皇宗の各御代が、皆國民の心を以て心となして統治し給へるが故である

高きやに登りて見れば烟立つ
民の竈は賑はいにけり

と其當時を謠はれた仁德天皇の治世は誰でも知つて居るのであるが、宇多天皇の如きも眞言宗の阿闍梨となりて、仁和寺に圓堂を建立せられた時に

我昔し人君に在り、萬姓惡を作すもの我身に歸す、今佛子と爲り、一身を以て善を修し、善く萬姓を利せん

と仰せられてある、近くは明治天皇も

つみあらばわれを咎めよ天津神
民は我身の生みし子なれば

と謠ひ給ふた、國民の罪を自ら負ふてまでも、我國民に幸福を與へんとの大御心は、實に恐れ多いとも、勿體ないとも云へやうのないことで、此仁政を雨らし賜ふ點が、丁度如意寶珠が萬寶を雨らすと同いことである、故に天皇陛下には是非共如意寶珠の三昧に住して戴かなければならない、國民が何故に如意寶珠の三昧に住せねばならぬかと云ふことは、人の人たる道は寶珠の如くするのであると云ふことを說いたが、萬民は皆如意寶珠の三昧に住して福々しく富んで居らねばならないことは勿論である、國家を何故に如意寶珠にするか、國家は文治と武備が完全でなければならない、此文治は寶珠の下部の圓形で、武備は上部の三角形である、平生の外交

は出來得る丈の敬意を表して、親密に圓く交際して行かねばならぬが、外國が我國の國威發展を妨ぐるやうな場合には、寶珠の三角の方を出して突き破る所の戰爭をしなければならない、所が平和々々と餘り圓く許りやり過ぎると所謂外交軟て、他國の侮辱を受くることとなり、餘り角許り出すと戰爭に疲れて國は亡びてしまうのである、內治もまた此の如くて、三角の方に力を入るゝと武斷政治となり、軍人跋扈となり、圓い方に傾き過ぎると文弱政治となり、華麗政策となるので、此調和が實に大政事家の手腕を要する所である、而して古來密敎が國家と寶珠の關係に就きて說く所に依れば、密敎は前にも云ふた如く、諸法を佛部、金剛部、蓮花部の三部に總括するのであるが其三部の三昧耶形即ち象徵の形は

三　部　三昧耶形　總別

佛　部……寶　珠……不二……總

蓮華部……蓮　華

金剛部……金　剛　杵……而二……別

となるのである、之を我國の三種の神器に應用して。

三　部　三種神器　而二不二　總別

佛　部……八尺瓊璽……不　二……總

蓮華部……八　咫　鏡

金剛部……叢　雲　劍……而　二……別

として居る、金剛部三昧耶形は金剛杵卽ち降伏の利劍であるから叢雲劍と符合するか、蓮華部は蓮華であるのに、之に鏡を合するは牽强附會であるとの說もあるが、是は一を知つて二を知らざるの愚論で、普通の時は蓮華部は蓮華であるが、最極深秘の瑜祇經には鏡となつて居る、然るに八咫鏡は卽ち八葉蓮華の形であるから、更に異論を狹む餘地はない、御璽は卽ち寶の珠である、故に太古は我國では三種の神器は天皇陛下のお側に鎭めさせ給ひたのであるが、後に八咫鏡は伊勢太廟に、叢雲劍は熱田神宮に御納め遊されたのは、總の御璽があれば別の劍と鏡が御側になくてもよいとの御趣意と拜し奉るのである、若し三種神器に此總別の德がないとせば、外の二種を他所に納め給ふのは、自ら夫丈の德が缺ぐることゝなる

尙一步進んで考ふれば、我國神代の思想は印度思想に類似したる點多く、大嘗祭の

神籠石は、印度の結界と其揆を一にし、鳥居と七五三も密教の修法壇の金剛橛金剛線に類似して居る、彼の神皇正統記が

我國は神代の緣起、此宗（眞言密教）の所說に符合せり、此故にや唐朝に在せしは暫らくのことにて、日本にとゞまる相應の宗なりと云ふ理りにや、大唐の內道場に準して宮中に眞言院を立つ、奏聞して毎年正月此所にて御修法（後七日御修法）あり、國土安穩の祈禱、稼穡豐饒の秘事なりき

とあり、また、後宇多法皇は眞言宗の根本道場たる東寺に、二十五條の御遺詔を賜ふて、其第三條に

夫れ以みれば、我大日本國は法爾の稱號、佛敎相應法身の土也、故に我後血脈を繼ぐの法資、天祚を傳ふるの君主、盛衰を同じくすべく興替を伴にすべし、我法（眞言密敎）を指す）斷廢せば皇統共に廢せん、吾寺（東寺を指す）興隆せば皇業安泰ならん、努力々々、我此意に背き悔ゆること莫れ

と仰せられたも、單に眞言密敎を尊重せられたのではなく、國家の理想と密敎の根柢とに、離るべからざる鎖鑰の存するとに想倒せられた結果に外ならぬのである、

十四　朝の祈り

後七日御修法は國家的の修法で一年に一回丈てあるが、吾人密敎の僧侶が、僅かに一年に一回、三十人や五十人で御祈禱したからとて、夫で滿足するものではない、吾等は時々刻々に此理想に向つて邁進し、此祈禱に丹誠を凝するてある、而して之を儀式として毎朝必ず修行して居る、之を小野流の方では後夜念誦の法と稱し、廣澤流では南向の法と云ふて居る、後夜とは初夜に對する語で、初夜は夕刻、後夜は晨朝てある、此晨朝に祈念讀誦する法てあるから、此法を後夜念誦と云ふのてある、南向の法とは京都から大和國室生山は南に當るので、南に向ひて此室生山の如意寶珠を拜むとの意味てある、南向の法と云へ後夜念誦の法と稱し、其名稱は異なるが國家が寶珠の理想を活現せよとも拜む點は全然同一てある、扨て吾人密敎の僧侶は何故に室生山の寶珠を拜むかと云ふに、室生山には弘法大師が大日如來より嫡嫡相承し來れる如意寶珠を埋めてあるからてある、弘法大師の御遺告に、

後夜毎に念誦の畢りに護身を爲せ、道肝を精進ヶ峰（室生山の主峰）に籠め、亦本尊海會を

彼岫（室山生）に安ずる也、是の祕密の呂は語らされば知れず、念ひ煩ふこと千廻也、專ら猥はしく聞か令むべからず、一を得て萬を知れ、

とある、守覺法親王は其著、秘鈔に室生山の如意寶珠を說いて、

黃色の光を放ち法界を遍照し、光中に衆寶を雨らし衆生を利し、或時は善風を出し雲を四州に發して萬物を生長せしめ衆生を利益し、水陸情非情悉く潤益を蒙る、

となし、進んで我心を如意寶珠と觀して、

彼（室山生）是（我心）冥會一體無二也、一切衆生の身中に、此くの如くの無盡莊嚴藏有るを知らず、六道四生の中に輪廻し、貧窮困厄を成就す、我吾功德を以て皆法界に廻施し、一切衆生と共に虛空藏菩薩と等同ならん、

前章の處世論に於て、吾人は寶珠の三昧に住して世渡をせねばならぬとを說ひたが、吾人が寶珠の信仰に於て、實證を得、寶珠の理想を實驗したならば、吾人は其所具の無盡莊嚴藏を開發し得らるゝのである、故に吾人は其修する功德の光明を法界に發射し、此熱誠の信念の勢力を十方に回轉せしめて、迷へる人を救ひ病める人を慰め惱める人を安ぜしむべきである

或は吾人が此の如き熱誠を注ぎ信念を凝めて祈り居るのを、輕々敷思ふものがあるが、抑も吾人が修する祈禱なるものは、口に如來の眞言を持し、手に合理の印契を結び、心を一境に凝して、全人格を其事に捧ぐるのである、夫が何等の感應反響がないと云ふことはない、今一例を擧げて話さう、予が曾て、秘密辭林を著す時、其序文を林董伯にお願致したので、葉山の別莊に御尋ね致した、其當時は韓國統監伊藤博文公爵が、ハルピンで安重根の爲めにピストルで弑せられた後で、新聞には韓國統監の候補者は林董伯と長谷川好道大將であるが、殆んど林伯に定まつたやうに書いてあつたので、予は伯に對して、閣下は近い中に韓國統監に御親任になるやうな噂がございますが、實に御苦勞のことでと申し上ぐると、伯は、伊藤公が存命ならば兎も角、伊藤公のなき今日は彼職は薩長の勢力爭で、吾々の方には御鉢は廻つて來ないよと、呵々大笑せられた、倫敦タイムスなども伊藤公の死は、日本外交に一變革を及ぼすであらうと云ふやうなことを書いた、實に伊藤公の死と云ふことは日本政治史上の大變革であつて、同時に世界的大事變である、此の如きの世界的大事件が

如何なることに依つて起つたと云へば、只安重根がピストルを打つたと云ふことだ、ピストルを打つ打つたと云ふことは、僅かに指一本を五分屈げるか屈げぬかと云ふ問題に歸着するのである、然らば指一本五分屈げるか屈げぬと云ふことは、直に世界的大問題であらねばならない、吾人の結ぶ印契も此理に出でぬのであるが、眞言を唱ふることも同じ理合で、美人か一たび笑ふ聲に城を傾け國を傾けたる例はいくらもある、心を一境に住せしむる觀念が、如何に潜在意識を活動せしむるかは、催眠術や千里眼の實施に依て明かなことであらう、

十五　室生山

密敎の末徒は室生山を崇拜して居ることを說いたに就いては、玆に室生山を紹介する必要がある、抑も室生山は如何なる所ぞ、寺傳には白鳳九年役小角が開基したとあるが、歷史の徵すべきものはない、其後寶龜年中に法相宗興福寺の所轄で賢憬が此寺に住み、其弟子修圓の時に愈興隆の緖に就いたらしい、弘仁九年に室生山龍穴神社に勅使を遣して祈雨せしことあり、天長元年に弘法大師神泉苑に祈雨して甘雨滂沱たりしかば、其功に依りて室生山を賜ひ、現今の保護建造物たる、五重塔灌頂堂、金堂等を建立し、大日如來より八祖相承の如意寶珠を此山に奉安し給ふたのである、弘法大師の根本主義は即事而眞であるから、一壇を建立し一寺を創立するにも必ず其敎理を實現せられたのである、故に密敎の根本道場の建立に就いては、西京東寺を胎藏界化他の道場とせられ、胎藏部の仁王護國般若波羅蜜多經に依りて、敎王護國寺と名け、高野山は金剛界自證の靈域として、金剛峯樓閣一切瑜祇經に依つて、金剛峯寺と云ひ、室生山は不二の秘密場として蘇悉地經に依り悉地院と名けられたのである、故に之を秘密にして弘法大師の御遺告には、室生山を秘すべきを示して、

大唐大師阿闍梨耶（第七祖慧果を指す）付屬せらるゝ所の能作性の如意寶珠を、頂戴して大日本國に渡り、名山勝地を勞り籠ると既に畢りぬ、彼の勝地といふは所謂精進の峰（室生山）土心水師（堅惠法師）の修行の岫の東嶺なるのみ、努力々々、後人に彼處を知らしむること勿れ、是を以て密敎切かに榮へ末徒博く延べん、

とある、「後人に彼處を知らしむ勿れ」と云ふ譯だから、此聖誡は末徒に嚴守せられて、

室生山と云ふ名は公の文書には更に顯れない、是が丁度弘法大師が瑜祇經を將來して、自作の章疏には盛りに引用し乍ら、入唐請來錄には秘密にして載せないと同じ筆法てのだ、弘法大師に繼ぎて室生山に住したのは、第一の高弟たる土心水師即ち堅惠法師である、堅惠法師は、弘法大師が傳敎大師に對へた風信狀の中に、

今思ふに我金蘭（傳敎大師を指す）及室生（室生山所住の堅惠法師を指す）と一處に集會して、佛法大事因緣を商量し、共に法幢を建て、佛の恩德を報ぜん、

とある、是程偉い人だ、故に昇天したとか入竺したとか云ふ說はあるが、正確の傳記となるべき史料は頗る少い、秘密の道場に遺法を嚴守せられたる其床しき御志は實に敬慕すべきてないか、淸和天皇が此山に幸せられんとしたことの外、こんな譯てあるから、史料は少い只知法の阿闍梨の間にのみ室生山は尊崇せられ憧憬せられたのてある、彼の小野の仁海僧正の作と傳ふる、ウ一山秘記には、

ウ一山とは是れ閻浮第一の靈處、密敎相應の勝地なり、我朝は大日如來還國の靈地なり、國を號して大日本國と名く、中に一の名山ありウ一山と號し、中に精進の峰あり一夥の寶珠あり大精進如意寶珠と號す……大日本國の形は獨股に似たり、獨一法界を表す、西土に九州あり金剛界の九會を表し、東境に八國あり、胎藏界の中臺八葉を示す、中に五幾內あり、兩部の五智五輪冥然一體の三昧也、彼の山は大和國に在り、和の字は卽ち兩部一體にして六大和合の義を顯す、凡そ衆聖遊行の靈地、佛法弘通の依所、只此國に在る哉、彼の山は卽ち室生山也、祕してウ一山と云ふ也、衆聖入定の禪室なるが故に室生山と號す、深く兩部中臺の大日如來內證寶部の三昧に入つて此山に安住したまふ、故に塵數三昧の諸佛菩薩及び八葉高祖、皆入つて此山に住し、同じく寶部の三昧に入つて各〻利生の妙用を起し巧度の方便を施す、乃至、我國風雨順次五穀成就百花實を結ぶ、貴賤上下一念發心する等の利益は皆是れウ一山寶珠の德用也、

思ひ切つて極端に室生山を稱揚して居る、一言に此說を牽强附會だと云ふ人もあらうが、如何に室生山を崇拜したか、如何に室生山が密敎の道場中に重要視せられたかと云ふことは、眼に見るが如く察せらるゝのてある、世に弘法大師が、

我身をば高野の奥に留むとも
心は室生にありあけの月

と詠まれたと傳ふるのも決して無理ならぬことである、

中古密教衰へて室生山、また南都興福寺の所轄に歸し、春日明神の奥院などと稱した事があつたか、元祿の盛時に及んで、護持院隆光の請に依て再び眞言宗となつた

然るに明治の維新に會して、此一宗の根本道場たる室生山も神佛分離の厄に遇ひて、境内の二百町は上地を命ぜられ、一宗が靈山として尊崇した精進峰も官有に歸し、岡倉覺三氏は無謀にも如意寶珠の所在所と傳ふる所を堀りて暴風急雨に會し又大林區署は此精進峰に斧鉞を加へたのである、丁度其時奈良縣知事若林賚藏氏が、他の用件で登山して、此慘劇を見て驚愕して即時に伐採の中止を命じたのである、吾人偶明治四十五年十月職を新義眞言宗豐山派宗務長に奉じたので、茲に管長猊下に伴して總本山晋山式に臨みて派祖專譽上人の墳墓を拜し、直に根來山の新義眞言宗祖興教大師の御廟を拜して大誓願を立て、轉して此密教の根本道場たる室生山を訪ふた、偶々精進峰が其七分は裸躰となつて、初冬の寒さをかこちつつあるの狀を見て、涙潸々として下り、實に密教の衰廢茲に至るやに驚き、思はず跪いて大師の冥鑑を祈りしことがある、若林賚藏氏の擧は是れ大師冥々の間に照鑑を垂れ給ふの致す所にあらずやと思ひ、狀を具して若林氏に謝意を表したのである、吾人は我國の財政が貧弱にして、内に殖産を興す能はず、外に國防を嚴にする能はざるを知るのであるが、去りとて一萬二千の寺院は全國寺院の一割五分を占め、其檀徒は約壹百萬あり、其信徒は天下に半ばする密教が、根本靈境として崇敬措かざる數町歩の小山を伐採するまでに、困廢し居るや否やを疑ふのである、否密教の末徒は鎮護國家の爲めに念誦し修法す、然るに其信仰の對象を毀ち其信念を奪ひ以て國の爲めに祈れと云ふ、實に矛盾の甚しきものであるまいか、

さもあらばあれ、室生山には今尚、弘法大師建立其儘の弘仁式唯一の建造物たる、

本堂（灌頂堂）	梁間六間、四尺六寸 桁行六間、五尺九寸	
金堂	梁間四間四尺六寸 桁行六間三尺五寸	
五重塔	間數壹間半四方	
大師堂	三間四方（此丈錢倉式）	

外に國寶として

彫刻木造如意輪觀音坐像　壹體　彫刻木造彌勒菩薩立像　壹體
同　同　釋迦如來立像　同　同　同　藥師如來立像　同
同　同　文殊菩薩立像　同　同　同　十一面觀音立像　同
同　同　地藏菩薩立像　同　同　同　釋迦如來坐像　同
同　同　藥師十二將神　十二體

等があり、我國の美術史上に陸離たる光彩を放つて居る、美術は國民の精華である、國民の精華として室生山を保護するのが惡ひてはない、併し此等の建物は弘法大師か最極大事の秘密灌頂を修行せられた遺蹟で、此等の佛像は弘法大師か信仰の對象とせられた靈體である、高野山も東寺も既に弘法大師當時の灌頂堂なき時に當り、此の如きの權威ある靈蹟の千年依然として嚴存するのは、實に云ふに云はれぬ喜びである、此靈蹟に於て、弘法大師の修行せられた其儘の秘密灌頂を修行して、僧侶は勿論一般信徒にも入壇せしめ、秘密の瓶水に休せしめたならば、如何に信仰の尊嚴が高まり、我國民の人格の權威は向上するのであらう、吾人は信仰の對象たる靈場を考古の閑人の蹂躪に任せて措くに忍びないのである、

十六　寶の生涯

說き去り說き來り、操り返し卷き返して、如意寶珠を紹介したが、是れ只諸君をして如意寶珠たらしめ、お互に如意滿足して福々しく「寶の生涯」を送つて頂きたいからである、お互か自己に內在する所の「寶の主」を握りて、自心に莊嚴せられたる無盡の寶藏を開發したならば、實に吾人は心機獨朗活殺自在の境界に入ることを得るものである、丁度夫は將に涸なんとする井を數丈堀り下げて、水道路に堀り當て淸水滾滾として湧き出るが如きものである、併し此境界に到達するには充分の修養を積まねばならぬ、元來宗教は實驗である事實である、只理論を知つたのみては何の役にも立たない、所謂他人の寶を數ふものである、玆に少しく修養に就いて話そう、予は自著「秘密百話」の中に於て、三密雙修に就いて左の如く記した、

吾人の身體の作用は三つに分類するとが出來る、即ち身體の作用、言語の作用、意の作用で之を密教では三密と云ふて居る、此三の作用は自然の約束で互に相反せしむるべき筈のものでない、水を呑まんとする時に、人に酒を命ずるか、若くは

手か水を口に運はなければ、如何に意ては水を呑みたくても水を呑むことが出來ない、即ち此三者は自然の約束上、必ず一致調和せしむべきものである、世の中の善惡の標準は此三作用を相和合せしむるか、若くば反對せしむるかで分るのである、嘘を吐くと云ふことは言語と意志と相反した時に起る事で、惡事を働くと云ふとは意にもないことを行ふに相違ない、若し惡事を働き乍ら、其人は意で是は善行と信して居つたならば、是は狂者であるから罪には問ふことは出來ない身體の作用と意の作用と背く場合に、茲に惡事なるものは成立するものである、故に密教を信ずるものは此身語意の三者を一致和合せしめなければならぬ、此三者の一致か絶對完全に行はるものが、即ち佛と云ふのである、而して自らが一致せしめたならば、他人も又一致せしめねばならぬ、自分の三密も一致し他人の三密も一致したならば、我も他人も佛と同いことになるから、此所を指して心佛衆生是三無差別の三々の平等の境界と稱するのである、

自已に內在する「寶の主」をして常に明了にして萬像其儘の實相を觀察し、長に濁浪なくして明月の影を宿さしむるには、平生に於て其修養を積まねばならない、此修養の第一義は靜思默想することである、

大聖釋尊は菩提樹下に默念單坐して、臘月八日の曉の明星を見て悟を開かれたと云ふが、禪宗の祖師で石か竹に當つたのを見て悟を開いたも、弓の先生が竹に雪の懸つて刎返す所を見て、矢を放つ呼吸を發見したも、さてはワットか鐵瓶の湯がグラ〳〵と煮立つて蓋を揚げるのを見て、蒸氣機關を發明したも、今の眠雷書伯が鶴の餌を拾ふ所から、六尺の筆で肖像を書くことを發見せられたも、皆其心が靜かになつて居る時のことである、若し心がゴタ〳〵して居つたならば、見れども見へず、聞けども聽へずで、眼はあつても筋穴同樣、耳があつても木耳（きくらげ）同樣である、扨て靜思の工夫に就いては古人が種々の方法をしたもので、或人は禪寺に參し、或人は靈山の巖窟に籠り、或人は秘密道場に阿字觀を修し、或人は荒瀧の前に坐し、或人は月を見詰る等のことをし居たものであるか、併し態々靜思の爲めに多くの時間を要するのでは實行が仲々出來惡い、そこで或人は夜間寢る時に少し靜坐して、終日の行爲を反省せよと云ふたが、終日疲れ果てた身體で、反省など始むるとは、返つて安眠妨害の種である、予自身の實驗から見ると、朝起きて洗面し終らば空氣の清く靜かな時に、

假令五分でも三分でも靜思するがよい、靜思と云ふても、只無念無想には仲々なれない、それてあるから自分の前に如意寶珠を置いて心に之を觀して口に如意寶珠の眞言たる唵阿羅婆羅吽を唱ふるのがよい、無論佛前か祖先の靈牌のある所に、靜坐して默想するならば一層妙てあるが、若し靜坐する所がないならば、庭に立ち乍らても椽側に腰を懸け乍らてもよい、此時には何ても目標にするものがないから、何んても庭にあるものを如意寶珠と觀するのてある、例せば庭の火燈の頭の寶形ても、又柵の頭が珠のやうに尖つて居るのてもよい、尙進んては庭上に咲き亂れて居る千日紅の花、丸形ダリヤの花ても寶珠と觀してよい、若し夫も無かつたならば、樫の葉、梅の葉、牽牛花の葉、苟も先の方が尖つて下の方が圓みのあるものてあつたならば何んてもよい、之を寶珠と觀するのてある、否こんな形はなくとも頗る簡單な形だから、冥想すれば此形は直に其眼前に顯れ來るのてある、此如意寶珠は宇宙の實在、人世の大道、國家の組織、處世の要訣、男女の關係を談るものてある、換言すれば人世は如意寶珠てあることを觀するのてある、而して口に如意寶珠の眞言たる唵阿羅婆羅吽を七返なり二十一返なり、隨意に唱ふるがよい、唵は歸命の義て、阿は胎藏

界の種子、吽は金剛界の種子吽は成就の意てあるから、此場合にはどうぞ我心と身の圓滿を得せしめ給へても、又は寶の主よ我を寶の生活に入らしめ給ひてても、若し强て深く立ち入れば、我と佛との冥合一致を成就せしめ給ひてもよいのてある、併しそんな面倒なことはいやだ、自分は一つ阿吽の呼吸て一儲けしたと云ふならば夫てもよい、ウンと活動して天下の奴原にアッと一泡吹せる程になりたいと思ふならば夫てもよい、苟も希望あり向上心あり修養を積まんとするものは毎朝此唵阿羅婆羅吽を唱ふべきてある、其間は僅か三分五分に過ぎないが、其效果は、非常に偉大なるものてある、天下の糸平は江戸へ天秤棒一本て、信州の山奥から出て來たのてあるが、彼は一年三百六十五日、毎朝洗面すれば必ず兩國橋の上に立つて天の運氣を見たそうだ、此の僅の時間に靜思熟慮したのが、彼が大成功をなした根柢てある、何事ても五日や十日は出來るものてあるか、一年三百六十五日一日も缺したことなく實行すると云ふは容易の事てない、若し一年三百六十五日どんな大事變に際會しても、毎朝洗面後に此唵阿羅婆羅吽が唱へられ、人生の眞義を大觀し得るやうになれば、其人は相當に修養を積んだ規則ある人てある、所が旅行する朝なぞ寢

過して、飯を食ふて居れば汽車には間に合はないと云ふやうな時に遭遇すると、**切符**を忘れて終ふ、鞄を詰める、靴を穿く、帽を冠る、泡を食つて停車場に驅付け、いざ切符を買はんとすれば、是はしたり、財布を忘れて來たと云ふやうなことをするのである、況や是以上の事件となつたら、實に御話にならない、西洋の格言に、大事に遭遇せば直に時計を見よ、と云ふことがあるが、大事變に遭遇した時に直に時計を見る丈の餘裕」のある人は餘程の修養積んだ人である、强盜が白刃を提げ來つて金を出せと云ふ時、ハア今時計が午前一時二十六分かと見定め得る人は事實に少い、斯く申す某も、昨夏三人の强盜の見舞を受けた時、愈々出て行く時に夜半十二時前五分と云ふを見定めた位である、言ふは易し行ふは難しである、讀者諸君と共に拳々服膺して「自己曼荼羅」を開顯し、其眞我の王國を建設し、進んで周圍を淨化し社會を醇化し一切群生と共に如意圓滿の「寶の生涯」に入りたいものである

新密教第一篇　**多加良**　終

大正三年二月十三日印刷
大正三年二月十六日發行

編輯兼發行人　東京市小石川區大塚坂下町十七番地　富田戮純

印刷人　東京市小石川區大塚坂下町十七番地　伊豆宥法

印刷所　東京市牛込區市谷加賀町一丁目十二番地　株式會社　秀英舍工場

寶奥付
定價金三拾錢

發行所　東京市小石川區大塚坂下町十七番地　加持世界社
電話番町三七二四
振替東京三〇九五

露光量違いの為重複撮影

遞信大臣　林　董伯序
京都大學總長　澤柳政太郎君序
東洋大學長　前田慧雲君序
東京帝國大學教授　高楠順次郎君序
豐山派前管長　權田雷斧僧正閲

仁和寺門跡　土宜法龍僧正題
天台宗座主　山岡觀澄僧正題字
高野派管長　密門宥範僧正序
豐山派宗務長　富田斅純著

秘密辭林

新時代の要求に應じて秘密の開放ぜられたるもの

只此一冊あるのみ

定價　五圓
郵税　十六錢
隅皮頗美本
菊判一千二百頁

發行所　東京市小石川大塚坂下町十七番地　加持世界社

秘密辭林批評集

東京朝日新聞（八千九百七號）

『秘密辭林』は最近加持世界社より發行せられたり、大日本地名辭書を編纂せし吉田博士ほどの苦心はなしとするも、編者富田斅純師が以往四年半の研鑽の功は、また決して生やさしきことにあらず、抑佛敎には顯密二敎ありて、眞言宗は其の密敎なること位は、靑表紙の一冊も手にする程のものならんには、誰れしも知れることなるべし、既に密敎なり、其の秘密にして口傳相承の外は、一切之を示さずといふ部分あり、之を事相と名く、而して之を以て其の宗の誇りとすることは、何事にも研究の鍵を以て進む文明の今日の世の中には、頗る考へものなり、此時に當り、一千年來秘密として、全く開かざりし寶庫を、幾多の毀譽褒貶に頓着せず、決然として展開し之を天下に公にせし富田師は勇者なり、吾人は書を開く前先づ此の勇を多とす。

今や世界の思潮は漸く唯心主義に傾き來り隨つて眞言秘密敎に指を染めんとするもの、東西漸く多からんとす、此時に際して此編著あり蓋し這箇思潮を照す一個の燈壹たるを疑はず、其の燭光の及ぶ所遠きや近きやは別問題として、全く暗黑なる極東秘密海に、遽然として現れたる暗黑臺は、學びの人誰か喜んで之を迎へざるものぞ。

玆に女去の字ありとせん、是を阿闍梨に問へば如法の略字なりといふ、如法を問へば如實の假字なりといふ、如實を問へば如意寶珠なりとこたふ、凡ての秘密事相の相承は此の如く迂回せる道程を辿らざれば、一印一明と雖も知る能はざるなり、吾人密敎の徒すら時に其の迂回の甚だしきに驚くことあり、況や門外漢をや、とは編著が序中に言ふ所なり、此は是れ簡單なる一例に過ぎず、編者が此の辭林を造り上ぐる迄に費せし勞力の如何を

露光量違いの為重複撮影

遞信大臣　林　董伯序
京都大學總長　澤柳政太郎君序
東洋大學長　前田慧雲君序
東京帝國大學教授　高楠順次郎君序
豐山派前管長　權田雷斧僧正閲

仁和寺門跡　土宜法龍僧正題
天台宗座主　山岡觀澄僧正題字
高野派管長　密門宥範僧正序
豐山派宗務長　富田斐純著

秘密辭林

新時代の要求に應じて秘密の開放ぜられたるもの

只此一冊あるのみ

定價　五圓
郵税十六錢
隅皮頗美本
菊判一千二百頁

發行所　東京市小石川大塚坂下町十七番地　加持世界社

祕密辭林批評集

東京朝日新聞（八千九百七號）

『祕密辭林』は最近加持世界社より發行せられたり、大日本地名辭書を編纂せし吉田博士ほどの苦心はなしとするも、編者富田斐純師が以往四年半の研鑽の功は、また決して生やさしきことにあらず、抑佛敎には顯密二敎ありて、眞言宗は其の密敎なること位は、靑表紙の一冊も手にする程のものならんには、誰れしも知れることなるべし、既に密敎なり、其の祕密にして口傳相承の外は、一切之を示さずといふ部分あり、之を事相と名く、而して之を以て其の宗の誇りとすることは、何事にも研究の鍵を以て進む文明の今日の世の中には、頗る考へものなり、此時に當り、一千年來祕密として、全く開かざりし寶庫を、幾多の毀譽褒貶に頓着せず、決然として展開し之を天下に公にせし富田師は勇者なり、吾人は書を開く前先づ此の勇を多とす。

今や世界の思潮は漸く唯心主義に傾き來り隨つて眞言祕密敎に指を染めんとするもの、東西漸く多からんとす、此時に際して此編著あり蓋し這箇思潮を照す一個の燈壹たるを疑はず、其の燭光の及ぶ所遠きや近きやは別問題として、全く暗黑なる極東祕密海に、遽然として現れたる暗黑臺は、學びの人誰か喜んで之を迎へざるものぞ。

玆に女去の字ありとせん、是を阿闍梨に問へば如法の略字なりといふ、如實を問へば如意寶珠なりとこたふ、凡ての祕密事相の相承は此の如く迂回せる道程を辿らざれば、一印一明と雖も知る能はざるなり、吾人密敎の徒すら時に其の迂回の甚だしきに驚くことあり、況や門外漢をや、とは編者が序中に言ふ所なり、此は是れ簡單なる一例に過ぎず、編者が此の辭林を造り上ぐる迄に費せし勞力の如何を

察せざれば、餘りに學問上の同情に薄き譏あらん、而して新思潮なる編者が此破天荒の事業を企てながら、密教古來の相傳を一絲亂さず、其儘に說明せるは、如何にも學問に忠實にして、亦後學を誤らざらんとする親切も見えて甚だ奥床し、卷中數多の挿圖を入れ、且西藏に行はるる佛像等をも載せたるは、此種の辭書として脫すべからざる事ならん、各語の說明は詳密といふにはあらざれど、簡明にして要を得たり、專門家には勿論物足らぬ節もあるならんが、此辭林の目的が、元と未だ祕密佛教の何たるを窺はざるもの及び其の初心の輩にせるものなれば、先づ此位の處が適切なるべきか、各語には一々古來慣用し來れる發音を附し、亦其下に附せる梵語は慈雲尊者の研究に據れりといふ。

元來佛教の術語は普通の知識にては解釋せられず、本式にすれば一個の佛教術語學をも形成すべし、其中にて祕密佛教の術語は難中の難なり、此辭林にて其の難は一通り會通せらるべく尙眞言密教獨特の祈禱や儀式や佛畫佛像等の事も亦以て知了するを得べし。

世は開けたり、而して其開けたる風は、吹かぬといつても矢張り少しは高野の嶺や根來の谷にも及べり、千古未發の祕密藏を一靑年僧の手に委して、其の開藏を恣にせしめたる同宗の寬容は、此珍らしき辭林と共に亦傳ふるに足るべし。

大阪朝日新聞（一萬五百二十三號）

佛教に關する辭典には曩に眞宗一派の佛教辭典あるのみなりしが今回更に眞言宗の富田敬純大僧都は獨力にて祕密辭林を大成したり、密教の內容は古來局外學者の指を染むるを許されずして全く祕密の裡に埋沒せられ居りしが、此辭林は一方同宗派の學者の研究に資すると共に、局外學者の爲に古來の祕庫を開いて之を大方に向つて開放せんとするものなり、同宗をして傳來の祕密境に閉籠むる能はざらしめ、廣く學界に向つて研究の對象たらんとするに至りしは時勢の然らしむる所なるべきが、古來口授直傳を以て師弟間に傳承し來りし教義を全般に亘りて叙說解釋するは容易の事業にあらず、況んや更に之を最新科學的研究に依つて解析するをや、本辭林は其の一着手ともいふべきものにして、先づ密教の相傳を其儘に記述し、一切の新研究とは沒交涉のまゝを存せり、之基礎事業としては然るべき次第にして內部學者の順序として先づ試むべきものなり、敬純師は十有餘年間東奔西走し或は古刹に密書を探り、或は大智識に親炙して口授を傳習し、具に研鑽を重ねて本書を成せりといふ、其宗界を益し後學を助くる効計るべからざるものあらん、說明は眞言密教により天台密教を參照し、五十音順に配し術語、論題、名數、流派、修法、印明、經軌、書名、如來、佛頂、菩薩、明王、金剛、寺名、堂塔、人名、地名、役位、裝束、儀式、聲明、法器、物名、雜語の各門に分ちて記述し、挿圖亦精巧にして善美、唯發音は古來慣用に從ひしは可なるも、他に索引の詳なるものなきは局外研究家の爲不便を脫れず、改版の際追加せらるゝならば妙ならん、更に印度西藏方面の研究を以て其解說を補ふが如きは、後日の事業として學者に期待せられざるべからず、兎に角吾人は宗教界近來の好著として此書を推薦せざる能はず。

時事新報（九千九百三十九號）

由來密教の研究は難事業の一つとされてゐた。如何となれば、東密台密源流必ずしも一つならず、遠く婆羅門教にも系統を有すれば、喇嘛教にも起源を持し、異同端倪す可らざるものがある。而かも此研究たるや佛教梵語學といはず、佛教藝術といはず、佛教戒律といはず、佛教觀法といはず、各其史事を詳にせんには、密教に俟たざるを得ない。本書は乃ち其研究に資する所多からんを期し、苟も筆に傳ふべき限りは、從來口傳すべきものと雖もこれを叙ぶるに吝ならず、能く曲折迂回せる祕密事相の相承を明示してをる、殊に人名は多く諱に從ひ、皇紀によつて生年寂年を註し、各語

下の梵語は慈雲尊者の研究に基づき、兼ねて羅馬字發音はウイリアムの音符によつたなぞて編者が世の所謂倫理道德を目して精神上の滋養物となし、一般宗教は又これが藥物て、更に密教は其劇藥なりといふ見解を持し、以て此書を公刊した如き、大に評者の意を得たるものである。

讀賣新聞（一萬二千二百二十五號）

本書は密教に關する語を集めて明說を下したる書なり。術語、論題、名數、流派、修法、印明、經軌、書名、如來、佛頂、菩薩、明王、天等、金剛、寺名、堂塔、人名、地名、役位、儀式、裝束、聲明、法器、物名、雜語等一切を網羅せり。著者富田大僧都は斯界少壯の學者、其の博識と勤勉とを以てして尙滿五箇年の日月を此の書の爲めに要したりと云へば著者の勞大なりしを推察するに足る。元來密教に關する辭詞の如きは其の意義極めて幽玄にして且つ故らに秘密に附したるを以て、一辭一語と雖も門外漢の窺ひ知る所にあらず、而も門內漢と雖も尙種々複雜なる手段を經ざれば傳授を得難かりしかば、今斯くの如き辭林の出るは其の教義に觸れんと欲する者の指針たるべきは論なく、好參考たるべきを疑はず、思ふに密教の傳來は最も古くして本邦の文明發達には頗る關係深く、本邦古來の歷史文學中には必か密教に關する語辭の續出する有樣なれば、此の辭林は是等の學者にも良師友たるべし。現時思想界の動搖著しく社會は何等かの歸着點を發見せんことに苦悶せる狀態なり、密教の研究をして容易ならしめ以て思想界動搖救助の一材料たらしむるも亦無用の事に非るべしと信ず。

東洋大學講師
豐山派宗務長　富田敎純僧正新著

秘密百話

（第六版）

裝幀　頗美
定價　金五拾錢
郵稅　金四錢
菊判百八十餘頁

全

東京朝日新聞曰く　眞言宗に於ける事相と理論とに關する雜筆一百種を集めたり、著者は同宗豐山派の宗務長として事務の敏腕を有すると共に少壯學者として今や同宗屈指の人なり此書小冊子と雖も初學者を益すること尠少ならざるものあらん！

萬朝報曰く　宗門の誹難を一排し「秘密辭林」を編して眞言密教の門戶を開ける著者は再び其蘊蓄を傾けて此書を成せり、眞言の教義、歷史、口傳など古來の秘密は事もなげに悉く暴露され秘密哲學の秘密は今秘密にあらざるに至れり、著者の勇氣頗る賞するに足る文章平易間々挿繪を加ふ！

やまと新聞曰く　既に眞言秘密と云ふ門外漢の容易に是れを窺ふ能はざるや論なし而も此の秘密を公開して其內容を世に示さんとするものは本書也著者は曩に「秘密辭林」の一書を著して我が學界を驚嘆せしめたる人なるが其一宗の宗務長なる劇職にありて尙且つ事を廢せざるの勇氣と精力には何人も畏敬せざるを得ず著者序文に云へる如く深行の阿闍梨のためにしたるにあらざるを以て其道のものより云へば幾分非難を容るゝの餘地必ずしもこれなしといふべからざらんも世人が最も難解とする眞言宗を極めて平易に解釋し一通其內容を門外の吾人に迄容易に之れを知らしむるを得たる其苦心は到底尋常一樣の士の企て及ぶところにあらす眞言宗を組織的乃至系統的に知り併せて加持祈禱の原理原則等を知らんとするものゝ必讀書たるや論なし！

權田大僧正監修　加持世界社編輯

大傳法院流 聖教第一編 四度次第

（十八道、金剛界、胎藏界）

護摩 附神供、表白、神分

●裝禎（帙入、次第仕立、全五册、頗る莊嚴）

特價 一部 金參圓也 郵送料共

眞言密教、東洋一代の法門は高祖弘法大師により創唱せられ、宗祖興教大師の興起を待つて、分派せる事相の法流はこゝに純一せられ、傳法院流は茲に完成せらる、加持門の開山として稱せらるゝに至りしなり、是に於てか加持門の末流を汲むもの必ず此の法流に浴せざるべからず、然るに本流の流傳久しく衰頽の狀に陷ゐりしが機運一たび動きて茲に本流の傳授盛に唱導せらるゝに當り、宗門また本流の擴帳を計るに會す仍ち聖教全部を出版印刷し求道の士に配布せんと欲し、其第一編として四度次第を刊行せり布くば傳授の法式に浴せざる者と雖も苟も眞言密教の源流を遡回せんとするものは一本を座右にするの要あるべし、

原本權田大學長祕藏之珍本、加持世界社編

傳法院流 傳法灌頂三卷式

全部三卷
コロタイプ
綴子軸表裝
定價金廿八圓四錢
郵稅金壹錢

大傳法院流灌頂三卷式印刷成る!!!　抑々我國佛教界に於ける各宗派の何たるを問はず、其の法流の統一を計り、紹隆に努め根本に培ひ、以て精神的一大發展を爲さんと欲せば、須く法流聖教の流布刊行に待たずんばあらず。而して我が眞言宗に於ける大傳法院流の歴史を按ずるに　高祖弘大師の本流、一たび高足眞雅僧正に傳り源仁に及び、其下本覺大師益信僧正に至りて廣澤の流を爲す、爾來、禪定法皇、寛空、寛朝を經て、寛助大僧正に至り、尋て嫡々の法流に興教大師に及び、紛糾せる法脈もこゝに整備の績を成し、大傳法院流の法門全きを告ぐるに至る、然るに智豐兩山、根山より分岐して學風を宣揚するに至つては、醍醐憲深方の傳法院流の法流頗る彌漫するに至り、傳法院流の法門また甚だ盛にならず、智山にありては第四世元壽僧正、豐山にありては第十一世尊如僧正の時、漸く傳法院流の復興を見るに至り、明治の聖代に及んで益々勃興盛大の機運に向ひつゝありと雖も、而も未だ其統一を缺き、興隆の精華を盡し得たりと云ふべきにあらず。茲に於てか本社は夙に見るところあり、曩には『四度次第』を刊行して、法流の流布紹隆を計り、昨年再び灌頂三卷式刊行の企を起し、其事業に親むこと既に三月幸にして印刷成り、其發刊を遂行し得たり、即ち原本は權田大學長秘藏の珍本をコロタイプ版に依り、古色を其儘に撮影し、表裝は緞子の極めて崇嚴なるを用ゐ卷軸の全部三卷となし、永世之れを珍藏して以て各寺院の寶物となすに其眞價の絶大にして、實に是れ本宗空前の出版物たるや、信じて疑はざるところなり、然りと雖も此事業の大にして再版の日近きにあらず。而も冊數既に限あれば希望者は直に申込あらんことを敢て告ぐ。

豐山中學校長　小林正盛先生述

通俗叢書

第二編

般若心經祕鍵講義

定價金四十錢
郵稅金四錢

本書は通俗叢書の第二編として發刊せるものなり。小林正盛先生は眞言宗中篤學妙文の士今や一世の蘊蓄を傾倒し、而も平易通俗を旨とし、教權主義の古典研究法を脱して、大に批判解釋を試み、其の意義を提ふること闡明、理義を判つや精細を極む。『十住心講話』を讀みたる者は更に本書に依つて其の知識を養ふべく、亦其の道を學ぶべきなり。著者亦倍層の努力を以て本書の著述に從事せるが故に、之れを叢書第一編『十住心講話』に比すれば讀者に必ず遙に進歩の跡あるを看取すべし敢て之れを江湖に推薦す。

豐山大學教授文學士　神林隆淨先生著

通俗叢書

第三編

菩提心論講義

菊判百二十頁
裝幀優美
定價金四十錢
郵稅金四錢

我國佛教界に於ける密教の研究は今や最盛の時代を示し、學界の一大思潮として廣く世人の注目するところなり、苟も人生に處して何ものをか其要領を得んと欲せば一に密教の何たるかを理解せざれば止まざるに至る是れ即ち密教の從來は其教義を祕藏し、世人の研究を禁じたりと雖も、時代の文化に伴ひ、密教の寶庫は遂に開放せられ、教義の甚深は忽ちにして社會世人の目を驚かし、其研究に從事するもの多く遂に今日の如き隆盛を呈するに至れり。是れ我佛教界のみに限らず、我國の學界に對し慶賀すべき一大傾向と云はずんばあらず。然れども今日佛教各宗派の研究に於て一々其特長を有するが如く、密教の研究は一層複雜にして特に事相の如き門外漢の能く知る能はざるところなり。故に今日學者の密教を講ずるもの敢て尠しとせざるも其意を得たる者果して幾數種かある。本社は夙に見るところあり、本宗の學者に依て密教の經典を講述し廣く社會の研究に便ならしめんと曩には十住心及般若心經秘鍵を出版し、更らに本書を刊行するに至れり、特に著者神林隆淨先生は學を本邦の大學に學び、哲學其他一般の科學を研究し、進て密教の研究に從事すること數年、今や積年の蘊蓄を傾注し、講述せられたるもの即本書なり、故に其通俗的なるは勿論容易に其意を了解し得べし、既にして印刷成る、苟くも眞言宗の高祖弘法大師の思想を知り、密教の精彩を知らんと欲するものは直に本書を繙くに躊躇することなかれ。

露光量違いの為重複撮影

345
9

豐山大學長　權田大僧正編

雷斧叢書　第一編　不動護摩私記　傳授私記

菊判百餘頁
定價金三十錢
郵稅金四錢

本書は雷斧叢書の第一編として發刊せられたり編者權田雷斧大僧正の眞言密敎に造詣深きは既に定評あり今や其蘊蓄を傾倒して其意義を解し其理義を釋して遺憾なし希くは斯道に志ある者振つて本書に依て研究し實修の道を養はれんことを敢へて江湖に廣告す

豐山大學長　權田雷斧僧正著

雷斧叢書　第三編　十八道傳授私記

菊判二百八十餘頁
正價七十五錢
郵稅八錢

雷斧叢書第一編を出して以來玆に又第二編を生むに至れり、是れ元より密敎に造指深き權田僧正の更らに多年の蘊蓄を傾倒し、編輯せられたるもの又以て斯道の研究と實修とに資するや實に大なり必ず一部を座右にせざるべからず

新密敎

		既刊
一第一篇	寶	大正三年四月發行
一第二篇	十三佛	大正三年九月發行
一第三篇	皇室と密敎	大正四年臺月發行
一第四篇	未定	大正四年四月發行
一第五篇	不動明王	大正四年九月發行
一第六篇	密敎の發達	大正四年十二月發行
一第七篇	興敎大師の信仰	大正五年二月發行
一第八篇	未定	大正五年五月發行
一第九篇	大日經物語	大正五年十二月發行
一第十篇	新密敎の建設	

露光量違いの為重複撮影

345
9

豐山大學長　權田大僧正編

雷斧叢書　第一編

不動護摩私記　傳授私記

菊判百餘頁
全　定價金三十錢
郵税金四錢

本書は雷斧叢書の第一編として發刊せられたり編者權田雷斧大僧正の眞言密教に造詣深きは既に定評あり今や其蘊蓄を傾倒して其意義を解し其理義を釋して遺憾なし希くは斯道に志ある者振つて本書に依て研究し實修の道を養はれんことを敢へて江湖に廣告す

豐山大學長　權田雷斧僧正著

雷斧叢書　第三編

十八道傳授私記

菊判二百八十餘頁
正價七十五錢
郵税八・錢

雷斧叢書第一編を出して以來茲に又第二編を生むに至れり、是れ元より密教に造指深き權田僧正の更らに多年の蘊蓄を傾倒し、編輯せられたるもの又以て斯道の研究と實修とに資するや實に大なり必ず一部を座右にせざるべからず

新密教

		既刊
一第一篇	寶	大正三年四月發行
一第二篇	十三佛	大正三年九月發行
一第三篇	皇室と密教	大正四年壹月發行
一第四篇	未定	大正四年四月發行
一第五篇	不動明王	大正四年九月發行
一第六篇	密教の發達	大正四年十二月發行
一第七篇	興教大師の信仰	大正五年二月發行
一第八篇	未定	大正五年五月發行
一第九篇	大日經物語	大正五年十二月發行
一第十篇	新密教の建設	

終